



25周年記念

磨光学園

高等学校・中学校

Content

| | |
|-----------------------|------------------|
| マリア像と校舎.....2 | 父母の会.....56 |
| 皆光学園と全景.....4 | 同窓会.....58 |
| 校歌.....6 | 学園の聖母.....59 |
| 創立者聖クラレット.....7 | 現教職員.....60 |
| クラレチアン会総長.....9 | 学園生活.....62 |
| ブスタボ・アロンソ | 校務分享表.....69 |
| 日本管区長 ヨゼフ・アベア.....10 | 施設並びに設備概要.....70 |
| 理事長ベトロ・デ・グランデス.....11 | 校舎平面図.....71 |
| 校長 小野 政.....12 | 在校生通学区域.....72 |
| 理事会.....13 | 卒業生数.....73 |
| 皆光学園のあゆみ(年譜).....14 | 教職員一覧.....74 |
| 歴代校長.....19 | 生徒会・クラブ活動.....76 |
| 歴代理事長.....23 | '82クラス.....81 |
| | 編集後記.....87 |

25Th ANNIV.

Claretian School

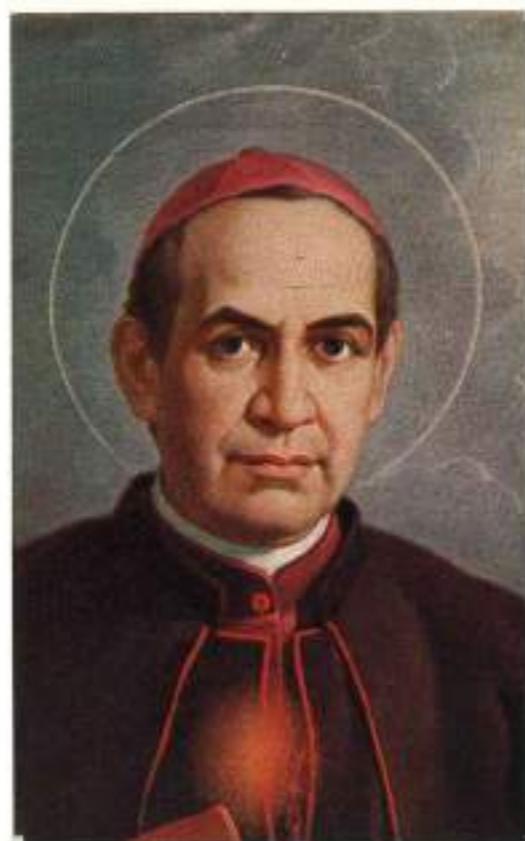




校歌

作詞—岡 省三
作曲—平原 正信

はてなき淀の流れに 学舎栄あり
光をかがげ 信仰と知識の いづみを求む
吾等はこのびゆく 啓光学園男児



クラレチアン宣教会 創立者 聖クラレット

「今日わたしたちは偉大な仕事を始めます。わたしたちが若い者ばかりだということは全く問題になりません。若ければ若いだけ、足りなければ足りないだけ、それだけ神の御保護があります。」42才のアントニオ・マリア・クラレット神父がほかのもっと若い5名の神父たちと、クラレチアン宣教会を発足させた時の言葉であります。時は1849年7月16日。場所はスペイン・カタロニア地区のヴィク市神学校の一室。「いつもただ神の御栄の為に、また人びとの救いの為に、イエズスキリストに倣ってどのように働き、苦しみ、努力するか、そのことだけを考えている。」これは聖クラレット自叙伝の1節であります。そこにはクラレチアン宣教会は国籍をこえて世界の人びとが、カトリックの信仰それに基づく立派な道徳と学問をもつように努力献身しなければならないという熱意と祈りの姿が示されています。この会の創立者は若くして名説教家としてス

ペイン各地に名を知られていましたが、間もなくキューバ大司教に任じられ、8年後スペイン国王一家の霊的指導者という王族待遇の顯職に就くことを余儀なくされました。その間この大司教は若い時からの沈思黙考の祈りの生活と清貧寒素な生活に徹し、政治問題は一切これを避け、睡眠時間を縮めての宣教著述、教会建設等による布教活動、教育事業、救貧事業、福祉事業に骨身を惜しまず挺身奉仕し、素晴らしい功績をあげ、1872年63才で帰天しました。しかも生前その身辺に不思議なことがたびたび起っており、その聖性によって1950年教皇ピウス12世はクラレット大司教を聖

人として公に聖祝しました。現在クラレチアン宣教会は世界の41ヶ国にわたって布教及び教育事業に従事しています。僅か6名の神父たちによって創められたこの宣教会の日本における事業の開始も、奇しくも同じ6名の若い会員によってでありました。Claretの文字は語源のラテン語では、「光」を意味します。よって本学園はクラレチアンスクール Claretian School「啓光学園」の名称をもっているのです。



聖クラレットの御遺物



啓光学園、聖堂内に置かれた聖クラレット像
(右手に持ち帰りの杖、左手に大司教の冠)
(必ず大司教冠をもちかざられる)

(Con ocasión del 25º aniversario del Colegio de Hirakata)

Al cumplirse los 25 años del Colegio Claretiano de Hirakata y al recordar mi reciente visita al mismo, hago llegar mis parabienes a toda la comunidad académica, a la vez que me uno a ella en la alegría y en la acción de gracias por el bien realizado a través de estos años.

El Colegio ha procurado prestar un servicio a las jóvenes generaciones del Japón no solamente con vistas a una habilitación profesional sino también de cara a una genuina cultura humanística, capaz de responder a los desafíos de un mundo en cambio acelerado. Para eso se ha inspirado en el Evangelio de Jesucristo, mensaje de libertad y de solidaridad fraterna, propuesta de un compromiso concreto con la historia y de una vocación trascendente del hombre.

Mi deseo y mi augurio más sincero es que la siembra de estos años dé frutos al ciento por uno; y que todos aquellos que han participado con fatiga en esta jornada -director, educadores, personal auxiliar, alumnos- encuentren ahora en ella un motivo de noble satisfacción y de imperecedera alegría, a la vez que una fuente de inspiración para su camino.

Roma, 1º de junio de 1982

Gustavo Alonso
Superior Generalis



ローマのクラレチアン会本部付聖堂



創立当初の会総長

故 ピーター・シュワイゲル



クラレチアン宣教会総長 グスタボ・アロンソ

啓光学園の25周年に当って心からお祝い申し上げます。

今年の一月に私自身が啓光学園を訪れた時のことを思い出しながらこのよき日に今迄の学校の歩みを振り返って皆様と共に大きな喜びを感じます。

この25年間のうちに啓光学園は日本の若者により教育を与えるように努めて来ました。それは単なる知識を与えることや、良い就職口を見つけるための教育ではなく、現代社会の中にあって責任のある人間を養成することを旨とする教育です。こういう教育の基本はイエズス・キリストの福音にあります。この福音は人間のまことの姿を示し、人間が永遠的な生命をもっていることを教え、本当の自由と愛とへ導きます。

25年間の間にまかれた種が豊かな身を結ぶように祈ります。

又このよき日を迎えることは校長先生はじめ教員、職員、生徒にとって大きな喜びであるとともに新しい出発へのきっかけであることを祈ります。

ローマ 1982.6.1



クラレチアン宣教会日本管区長 ヨゼフ・アペイア

「全世界に行って福音をのべ伝えなさい」というイエズスの言葉に応じて啓光学園の歩みが始まりました。

クラレチアン宣教会が福音的価値感に基づいた教育は、人間を真の幸福に導き、又愛と正義に根ざした社会を築いて行く為には非常に大事なものであるという確信を持って啓光学園を創立したのです。創立時に色んな問題に直面しなければならなかったのですが、同じ確信に満ちていた人々の協力によって歩みだしたのです。その人々は経済的には日本より恵まれていない環境からでも惜しみない協力をして下さったのであります。クラレチアン宣教会も日本の教会もその人々の期待に応える責任を深く自覚し25年間の歩みの中で大事にしてきたのであります。

啓光学園は成長しました。大勢の生徒は卒業して今は大学で勉強に励んだり又社会の中で委ねられた責任を果たしたりしているのであります。卒業生は啓光学園在学中にイエズスの福音に触れる機会を与えられました、卒業生の心にまかれた種が良い実を結ぶように私は祈ります。

25年間の歴史を振り返ってみますと2つのことを感じます。

「感謝」

まず25年間の歩みの中で私達を見守り導いて下さった神に対する感謝であります。困難な時がありましたが神様の助けによってそれらを乗り越えていくことが出来たのであります。そしてこの25年間の間に共に歩んで下さった多くの人々に対する感謝なのです。啓光学園の発展は皆んなの働きの実りであります。

「責任」

ミッション・スクールとして啓光学園のもっている使命をより深く自覚し、より忠実に果してゆくことに対する責任なのです。生徒の進学率をよくすること、学校における規律とか、生徒の色々な面での成長に力を入れるのは大事なことでしょうが、ミッション・スクールの中でそれと同じ様に大事にしなければならないのはキリストの福音をのべ伝える事です。これこそがミッション・スクールの評価の基準にならなければなりません。これこそが学校の誕生を可能にして下さった人々の願いであり、彼らに対する私達の責任であります。その為に教職員を初め学校に関わっている人々の深い理解と積極的な働きが必要なのです。キリストの福音を知らせることこそ啓光学園の使命であります。

25周年を祝うことは喜ばしい事です。この祝いは啓光学園にとって新しい出発になることを願っています。

啓光学園の全職員、生徒そしてその家族の上に神様の豊かな祝福を祈ります。



理事長

ペトロ・デ・グランデイス

我が啓光学園は25周年を迎えることになりました。お喜びに堪えません。

啓光学園の夢んだ道を思い出したいのです。カトリック大阪司教区長であった故田口愷機卿様は福音宣教を促進するために沢山の宣教師を大阪教区に集め、青少年の教育に力を入れられました。そしてクラレチアン宣教会の総長様に中高等学校を設立するように要請されました。クラレチアン宣教会は田口司教様の要望に応じて学校の豊かな経緯に富んで

いたイエズス・ゴンザレス神父様をフィリピンから日本に派遣されました。ところが日本におけるクラレチアン宣教会の宣教師は生活にさえ非常に困っていましたが、司教様と総長様によって示された神様のみ旨を受け入れ、資金をもたないままに神様に対する深い信仰と若さの大胆さをもって学校設立に踏み切ったのです。そしてとりあえず土地を捜すことになりました。当時枚方市長であった寺島様は枚方市に高等学校を望んでおられましたので自分の仕事として土地の斡旋を引き受けて今の敷地の3分の2程度を購入することが出来ました。それはクラレチアン宣教会のアメリカ管区の寄付で支払われたのです。実はいただいた寄付を全部土地に使い込んだので、校舎の建築を引き続きするとは考えていませんでした。当時私たちは未熟な者で日本の法律や漢字もあまり知りませんでしたので、土地を出来るだけ沢山買っておけば将来困らないし、また校舎は資金が手にはいったとき考えればよいと思っていましたが、田口司教様に呼ばれて売買契約書をよく読むようにと注意されました。もう一度読んで見ると6ヶ月以内に建築を始めないと土地は枚方市に渡ると記入されていたので、非常に驚いて資金の見通しが全然なくて校舎の計画を立て始めたのです。啓光学園の初代校長は資金獲得のためにアメリカとメキシコに渡り大変苦勞されましたが、資金の一部しか得られなかったのです。カトリック教会の本部であるヴァチカンの援助でようやく必要な資金を獲得したのでした。それから2年あまりたち、高等学校開設の手続きを始めたところ、新しい校舎の増設を府庁に要求され、敷地を広める必要がでてきました。ガルドアノ神父様は再度アメリカとメキシコに行き、さらに2、3回にわたってヴァチカンとクラレチアン宣教会の援助をいただいて来ました。皆様は現在の啓光学園の敷地および校舎をごらんになると本当に恵まれていることとお考えになると思いますが、その背後には大変な苦勞があったわけです。このような事実を踏まえて啓光学園の発展のために全力を尽す決意であります。啓光学園の設立目的は、6年にわたって教育の中に、キリストの精神を盛り込んで、健やかな身体と豊かで健全な精神を培うために、青少年に人間の生まれた目的や、生きる価値観や、神様の私達に対する慈愛や人間に対する兄弟的愛、そして平和的な協力と相互理解と誠意を尽して人間らしい生活を送るように教えることであります。

この25周年を記念するに当たって日本におけるクラレチアン宣教会の神父たちは、神様の祝福を信じてこの大事業を始めたのですが、事実において神様のお恵みを豊かに賜りました。まことに感謝に堪えない思いであります。また國の恩人、特にヴァチカンと外国のクラレチアン宣教会に対し感謝の意を表わすとともにお祈りをささげます。また啓光学園の発展のために犠牲を惜しまずに協力して下さっておられる教職員の皆様方に敬意を表わし、心から感謝いたします。

神様の祝福と啓光学園の保護者である聖アントニオ・マリア・クラレットのおん執り成しによってわが学園がますます発展しますように！



現校長 小野 教

今年学園創立25周年を記念することが出来ますことを先ず愛の神に感謝し、学園保護の聖人クラレット大司教へ心からの祈りをささげたいと思います。そして東西もままたらぬ学園草創のときに、苦心慘澹されたクラレチアン宣教会の神父さま方、それを温かくささえて働かれた諸先生、そして学び舎に励んだ卒業生諸君とその保護者の方がたの熱意、またそれを理解せられた学外関係者各位のご支援のもとに、わが啓光学園の歩みが拓かれていったことに深い謝意を表せざるを得ません。まこと25周年の学園の現在は創立来の過去の実績に続くものであり、将来の校運はまたこの現在の上に築かれるものであります。学園中学校の現状は創立当初の頃にも似て、潑刺とした意気込みを示すようになったと思われれます。このことは誠に喜ばしいことながら、他方高校生徒急増期の現在は同時に数年後の否応なしの急激減期につながる重大時期でもあること、ここに言を俟ちません。この10年間学園の校長の職務に携わっている者として、この現在の職責がいかに重かつ大であるか、同時にまたその遂行が道遠くしていかに「狭い門」であるかを痛感しております。

たしかに学園25年の歩みには中途相当の紆余曲折がみられます。しかしながらその曲折がどんなものであったにせよ、聖クラレットの生涯を多少なりと調べたわたくしとしては、啓光学園がもともとミッションスクールとしてスタートをきったことに盡みるべきであると考えます。キリストのみ教えに基づく人間観と、聖クラレット大司教の宣教とその努力、奉仕の生活実践の原点に、全学園関係者一同と共に、改めて謙虚に思いを致し、学園第二の飛躍発展への足固めの「希望」の年として、銘肝したいと考えております。まことにキリストは「希望をもって祈れ」と教えられました。「願え、然らば与えられん。探せ、然らば見出さん。叩け、然らば開かれん。そは総て願う人は受け、探す人は見出し、叩く人は聞かざるべければなり」と。(マテオ7章7～8節) わたくしの年来の座右銘でもあります。

理事会



理事長
ペトロ・デ・グランデス



理事
小野 教



理事
松井 秋郎



理事
ホルヘ・フランケサ



理事
イエズス・ゴンザレス



理事
ホセ・アベイア



理事
ジョージ・ギター



理事
大朝田 照雄



理事
ボンファイニ・マリオ

歴代理事氏名

| | | |
|---------------|---------------|------------|
| ゲラルド・モレイラ・セサラ | ホセ・ガルデアノ | 目黒 三郎 |
| 岡村 嘉熊 | アルフォンソ・ヨレンテ | タルシシオ・スーテル |
| アントニオ・プリスキー | 松下 幸之助 | 村岡 四郎 |
| 浅田 敏章 | ヨセフ・モンテロ | |
| アンゼル・フェレー | デメテリオ・デ・ラ・ローサ | |
| マヌエル・ブルネット | フェリペ・カルバフォ | |
| マヌエル・サンチェス | 小林 儀三郎 | 荒川 虎一郎 |
| 立石 重民 | タルシシオ・ロメロ | ホセ・ティシドー |
| 二ノ宮 芳男 | | |

〔啓光学園25年のあゆみ〕

- 1950年
(昭和25年) クラレチアン会、ブリスキー神父ら来日。
- 1954年
(昭和29年) 1月 学校建設用地に関して、寺嶋牧方市長に協力要請。
- 1956年
(昭和31年) 6月 ホセ・ガルデアノ神父、校長に決定。
9月 校舎の建設はじまる。
- 1957年
(昭和32年) 2月14日 学校法人啓光学園・啓光学園中学校認可。ルイス・ズサン神父、理事長就任。
2月 第一次入学試験(受験者8名)。
3月 第二次入学試験(受験者7名)。
3月 校舎(現4号館及び改築前の3号館)落成祝別式。
4月 中学校第1回入学式。入学生10名。
5月 春の遠足(私市)。
8月 臨海学校(淡路島)。
10月 秋の遠足(奈良)。
- 1958年
(昭和33年) 2月 クラレチアン会総長代理アメリカ管区長エメテリオ・ア・ラ・ローサ師来校。
4月 第2期生入学(17名)。
8月 ルイズ・ズサン理事長退任。ベトロ・カバイエル神父、理事長就任。
- 1959年
(昭和34年) 1月 スペイン語が正課となる。
5月 駐日スペイン大使アントニオ・ピラシネロス氏来校。
6月 駐日ヴァチカン公使マクシミリアノ・フステンベルグ司教来校。
12月 啓光学園高等学校認可。
- 1960年
(昭和35年) この頃、校歌ができる。
2月 中学校第1回卒業式。
3月 小神学校校舎(現クラレチアン・レジデンス)落成。
4月 啓光学園高等学校開校(第1期入学生26名)。
6月 父母の会発足。初代会長に岩田一二氏就任。
9月 生徒会発足。
11月 第1回体育祭。

- 1961年
(昭和36年)
1月 新校舎(現5号館)落成。
5月 駐日ヴァチカン公使ドミニコ・エンリッチ大司教来校。
9月 ペトロ・カバイエル理事長退任。イエズス・ゴンザレス神父、理事長就任。
- 1963年
(昭和38年)
2月 高校第1回卒業式(卒業生20名)。
3月 第1回スキー教室(白馬岩岳)。
8月 イエズス・ゴンザレス理事長退任。デ・ラ・ローサ神父、理事長に就任。
ホセ・ガルデアノ校長退任。ヨセフ・モンテロ神父、校長就任。
10月 体育館・啓光会館竣工祝別式。
- 1964年
(昭和39年)
5月 駐日ヴァチカン公使カーニャ大司教来校。
10月 第1回文化祭。
- 1965年
(昭和40年)
6月 マリア像除幕。
- 1966年
(昭和41年)
3月 デ・ラ・ローサ理事長退任。ペトロ・デ・グランデス神父、理事長就任。
ヨセフ・モンテロ校長退任。イエズス・ゴンザレス神父、校長就任。
8月 啓光白馬ヒュッテ完成。
- 1967年
(昭和42年)
5月 50米プール完成(創立10周年記念)。
11月 バドミントン部・第15回私学大会優勝(以後昭和53年まで優勝)
- 1968年
(昭和43年)
1月 フグビー部、第47回全国フグビーフットボール大会に出場。
1回戦 啓光16-9岐阜 2回戦 啓光11-16新田
- 1970年
(昭和45年)
3月 イエズス・ゴンザレス校長退任。マヌエル・サンチェス神父、校長就任。
11月 ペトロ・デ・グランデス理事長退任。アントニオ・ブラデア神父、理事長就任。
- 1971年
(昭和46年)
3月 マヌエル・サンチェス校長退任。小林儀三郎、校長就任。
6月 アントニオ・ブラデア理事長退任。イエズス・ゴンザレス神父、理事長就任。
- 1972年
(昭和47年)
3月 小林儀三郎校長退任。小野敦、校長就任。

- 1973年
(昭和48年)
4月 イエズス・ゴンザレス理事長退任。ホルヘ・フランケサ神父、理事長就任。
- 1974年
(昭和49年)
2月 ホセ・ティシドー神父、(事務局長)スペイン・ヘロナ市で帰天。
3月 2号館竣工。
3月 ホルヘ・フランケサ理事長退任。ペトロ・デ・グランデス神父、理事長就任。
- 1975年
(昭和50年)
4月 クリア・サビエンス両コース制開始。
- 1976年
(昭和51年)
2月 クラレチアン会総長アントニオ・レギサ神父来校。
10月 小野敦校長、「聖クラレットの生涯」出版。在校生・父母に配布。
- 1977年
(昭和52年)
3月 3号館竣工。
- 1978年
(昭和53年)
8月 アントニオ・プリスキー神父(元英会話)、アメリカ・リビングストン市で帰天。
- 1979年
(昭和54年)
7月 デ・ラ・ローサ神父(元理事長)、枚方で帰天。
7月 中学校臨海学校(7km遠泳)。
11月 小野敦校長叙勲(勲4等瑞宝賞)。
- 1980年
(昭和55年)
2月 中学夜間耐寒徒歩訓練(40km)始まる。
- 1981年
(昭和56年)
9月 平原正信教諭(音楽科)逝去。
- 1982年
(昭和57年)
1月 クラレチアン会総長 グスタボ・アロンソ神父来校。
2月 高校第20期生卒業。
3月 中学校第23期生卒業。
8月 水泳部・大阪私学大会総合優勝。
9月 水泳部・ラグビー部から第37回国体(くにびき国体)出場。
11月2日 創立25周年記念式典挙る。

por José Galdeano

¿Que escribo algunas impresiones sobre la fundación del Keiko? Mirar desde el Japón y desde el Keiko de hoy al Japón y al Keiko de hace 25 años, es algo así como pedir a Urashima Taroo, cuando regresó del fondo del mar montado en la tortuga, que nos cuente algo de su infancia. Había cambiado todo.

Pues sí, en aquel entonces, las supremas autoridades cristianas de Roma se comunicaron la noticia de que iba a nacer en Hirakata un colegio de segunda enseñanza y que fuera yo el director... y que pensara en el nombre que había que ponerle... y que comenzara todos los preparativos para el nacimiento...

Sin experiencia de este tipo de paternidad, y sin poder negarme, contesté al entonces Superior General P. Schweiger con el "Fiat...".

Lo que nadie sabíamos era lo que en Japón suponía entonces fundar una escuela privada. Las montañas de documentos y requisitos que el gobierno japonés exigía se equiparaban al Fuji. Menos mal que ignorábamos las dificultades que nos esperaba a la vuelta de la esquina, pues de haberlo sabido no hubiera nacido el Keiko.

El primer susto se lo llevó el mismo P. Superior General

... que el P. General me dijo: "Compra un ticket de avión y con mi bendición elija la ruta que crea más adecuada para conseguir ese dinero".

Y desde incontables pulpitos, periódicos, emisoras de radio y televisión en los Estados Unidos, México y República Dominicana, las gentes me oyeron hablar de un colegio que iba a nacer... invitándoles a que fueran los padrinos. A los seis meses regresé con lo justo para construir el actual Chugakko.

Viajes de este tipo tuve que repetir para construir el Kotogakko y después el gimnasio. Pero el terreno que habíamos comprado no era suficiente para el proyecto. Los propietarios de los terrenos contiguos eran labradores enraizados en sus propiedades. Después de pensar y pensar

aquel momento...
... que ocupan puestos
Japón como en el extranjero, como Kazuo...
La compañía Fujitsu le encomendó representaría en España. Y Yaku Ojawa, director en Puerto Rico y luego en Venezuela de la oficina de su compañía Taihei, y otros que llenan

a el Keiko de hoy.
privado no atrae por la grandiosidad
or la calidad de sus profesores.
el gobierno japonés, ocupado entonces
rmas heridas de la guerra, no disponía
escuelas privadas.

ado y con un interrogante como porvenir,
lía ofrecer a los nuevos profesores?
constar que los primeros profesores
Urawara, con el joven Kawai a la cabeza,
n de fundadores, y sin pensar en el fu-
y con una dedicación de auténticos educa-
aron a la ingente tarea de crear el nuevo

el aquel dicho de que las obras grandes co-
oco, y que los grandes éxitos tienen por
caso, el porvenir del Keiko es esperan-

el de
le apro-
requi-
tivo,
ruido
Sin
así

A hasta la de Kioto, inundados de
ciones, trenes y autobuses, llamando
E las nuevas aulas del flamante co-
ido.
mal no recuerdo, ingresaron nueve alum-
enaron otros tantos que eran sobria-
is y de la diócesis de Kioto.

erno de cuatro pisos con sólo 18
udito. Tanto que pasó a ser la
momento en todo el Japón.
ión nacional que asistieron a la
una columna y un programa bajo el
anaeni".

to llenaba la pantalla, y entre alum-
llenábamos un aula.
los años que siguieron, comenzaron a
geométrica. A más alumnos, más edi-
cios...

y mis sucesores para que canten los

José Galdeano



「啓光」誕生の頃の思い出

初代校長 ホセ・ガルデアノ

25年前の啓光学園について書くとなるとまるで浦島太郎のような思いです。ローマの総長から学校創立とその校長になること、そして学校設立手続もするようにとの通知をうけた。当時私たちは、学校設立の場合、富士山の高さにも較べられるような仰山な書類が必要だということを知りませんでした。来日せられた総長に対し、府庁の関係部長が学校設置は認めるが、それには最低12万ドルの基金が必要だし、右資金の送金の証明をローマより取り寄せることが条件と伝えた。総長は大変だなという顔をせられたが、なんとかしてその資金を調達するように」と私に依頼された。「よし、やってみせるぞ」と私は心ひそかに決意した。そうしたことがあって、アメリカ・メキシコ・ドミニカ等の諸国の教会で、さらにまた新聞、ラジオ、テレビを通じて寄付を呼びかけ、6ヶ月後中学校舎建設資金をようやく手に入れることができた。その後の高校校舎、体育館建設の時も同様に、諸国の信者の温かい寄付を受けたのです。校地も狭かったので、土地所有者の家を歴訪して、苦心の末現在のように拡張できたが、新校地の山の斜面には沢山の防空壕が掘られていた。現在の運動場は当時雑木の植物園のようで、ここから観ると淀川が静かに海に向かって流れ、その流れは遠く諸大陸に達している……こんな思いをした私でした。そうだ、この学園は若者に対し防空壕の役目を果たす一方、ここから大きな望みと豊かな知識に満たされて、やがて日本の社会だけでなく広く世界に雄飛する若者が出るだろうと夢みる思いをした私でした。この夢は事実となった。卒業生諸君の中に啓光の名を海外に広めている人が幾人もいることを私は知っている。

私学の偉大さは建物ではなく教育の中味にある。当時は私学への助成金は全くなかったし、伝統のない新設校の教師達に将来への魅力をどう与えるべきか、私は悩んだ。河井、岡、岡村の諸先生が開拓者の意気に燃えて献身的に赤ん坊の学校のために働かれた。「偉大な業は小さな業から始まり、大きな成功は小さな失敗の上に」この格言が真であるならば、啓光の将来は希望に充ちたものである。ところが宣伝のポスターを広くあちこちに掲げた結果が、なんと募集に応じた生徒はたったの10名教師の数と同じぐらい。3階建ての校舎が造られているのに、こんな状況を開校当時の新聞は「もったいない話」の見出しで書き、テレビも校舎正面を大写しに送映した。しかしながらこの生みの苦しみこそ、後の学園を幾何級数的に発展させてゆく芽となったと信じている。



二代校長
ヨセフ・モンテロ
(アメリカ在住)



元理事長・三代校長 イエズス・ゴンザレス

啓光学園の創立の思い出

大阪の田口司教さまとクラレチアン会のシュワイゲル総長さまとが、カトリック教育の必要性について話し合われた結果、新しい学校づくりが決まりました。1952(昭和27)年私がフィリピンに居りました際、シュワイゲル総長さまから手紙をいただき、私は日本に来ることになりました。その手紙の中にもう一つの書類が同封されていました。それはこれからクラレチアン会は司教さまの希望に従って大阪教区において、学校教育を始めようというメッセージでした。田口司教さまは学校新設のためにさっそく土地を準備されましたが、都合があってその土地を利用することはできませんでした。それでクラレチアン会の神父達は枚方の寺島市長に相談したところ、市長は喜んで協力を約束しました。1954(昭和29)年のことでした。こうしてカトリック系私学の新設は枚方市の青少年教育と発展に大変大切であることを、中宮地区に田畑をもっている人達によく説明して、クラレチアン会は1万坪(およそ坪当り700円)の土地を手に入れることになりました。その後特にガルデアノ神父のはたらきによって数千坪を加えました。1956(昭和31)年6月総長さまは学校建設資金として、クラレチアン会が適当額の資金をととのえることについて、大阪府の教育関係者に約束しました。この年の9月校舎建築が始まり、1957(昭和32)年3月24日300人の生徒を収容できる校舎が完成して祝別式が行われました。府庁の代表者の方、枚方市長寺島氏の祝詞やクラレチアン会神父の挨拶などがありました。こうして啓光学園中学校がはじまりました。

1959年(昭和34)年11月高等学校校舎の建築がおくれたことについて府庁の調査がありましたが、学園の事情を了解していただいてその許可を得ました。こうして昭和35年啓光学園高等学校がはじまりました。



啓光学園25周年によせて

四代校長 マヌエル・サンチェス

啓光学園創立25周年に当り、心からお喜びを申し上げると同時に、激励の挨拶をお送り致します。

私が学園に携わっていた7年の間、いつも我校を、新しく若い、これからの学校のように思っておりました。しかし、現在、最初の卒業生は既に40才近くになっており、彼らの子供達の中には、もう(啓光学園?)中学に入っている者もおられるでしょう。

第一期生には数千人の後輩があり、現役の生徒には数千人の先輩がいます。従って啓光学園は、今日、豊富な歴史と伝統を蓄え、大きな家族のようになってきました。

11年以上前に学園と教育者を離れた私は、時々勉強や仕事のため外国で生活している卒業生と会い、時には、肩を並べていっしょに仕事をしたこともあります。彼らはよく私の家に遊びに来て、酒を飲みながら夜を徹して話したこともあります。そういう時は、親が成長した子供と大人同志の話ができて感じる喜びに似たようなものを私も味わいます。私が啓光で教えた1,300人余りの生徒に比較すれば、このようなつきあいはごく少ないものです。しかし、学園を離れ、遠い所で教育とは全く違った仕事をしている以上、仕方がありません。

時のたつのは早いもので、あの新しく若かった啓光学園は、今年成人式(?)を迎えることになりました。そのお知らせを聞いた時、啓光学園時代が急に懐しくなり、楽しかった思い出だけが生き生きとよみがえってきました。これらの思い出と貴重な体験を与えて下さった諸先生はじめ、職員の方々、生徒と父兄の皆様から心からお礼を申し上げます。

現在の私の立場からしますと、啓光学園時代にもっと本当の意味の国際人を育てるべきであったということです。実際、現に日本は今こういう国際人を必要としているのです。単に語学に堪能であるばかりでなく、日本が世界に教えるべきもの、他国から学ぶべきものの意識と知識を持ち、そのための交流をうまく行なえる人が求められているのです。今後もし、学校教育に携わることがあれば、そういう国際人を育てることを第一の目的にしたいと思います。

最後に、啓光学園の益々の御発展をお祈り致します。



創立25周年に当って

五代校長 小林儀三郎

今までとは勝手のちがったミッションスクールに転じたのは、創立まだ浅い頃、校舎も整わず、職員、生徒も数えるほどでしたが、それなりの新鋭の気分も充ち、神父さん方も、スペイン系の、陽気で他意のない所が、カトリックの学校という厳しさの中の、多少は形式的な面での違和感もありながら、何とか一介の教師として、随いて行けそうな気持ちを抱かされました。それが、事、志とちがって、いつしか管理面のお手伝いをするようになり、うかうかと、10年を勤めてしまいました。肝心のカトリックの勉強が不十分で、神父さん方にご迷惑をおかけしたことを、今さらながらに恥ずかしく思っております。

この間、フランスのミッテラン首相の見えた時、NHKがパリの街頭録音をテレビで紹介していましたが、「日本人をどう思うか」という質問に、「以前と比べて、パリで見かけるこの頃の日本人は傲慢に見える」と、1人の若者が答えていました。これには、最近のヨーロッパへの日本の経済進出のにがにがしさが背景になっているかと思われませんが、それ以上に、個々の日本人のそれとない表情の具体的な指摘とも受取られました。

カトリックの学校には、いわゆる進学面での世間的な評価の高いの多いのですが、常に敬虔であることは、カトリックの基本的な教えであり、常に敬虔であることはまた、少なからぬ勇気の要ることでもありましよう。自らを神とする傲慢から脱し得ぬ限り、真の自由と平和の守り難いことを、この頃、遅まきながら切に感じておりますので、八方破れの小生とちがって、十分の経験と固い信念をお持ちの小野先生に後事を託し得たのは、たいへん幸であったと思っております。25周年はアッという間に50周年になることでしょう。学園の発展を心からお祈り致します。

歴代理事長



初代
ルイス・ズサン



二代
ペドロ・カバリエル



三代
イエズス・ゴンザレス



四代
デメテリオ・デ・ラ・ローサ



五代・七代
ペドロ・デグランドス



六代
アントニオ・プラザ



八代
ホルヘ・フランケサ



校章

星は古来、柔和な光・永遠の光を示すものとされ、また、イエズス・キリストの誕生発見の指標ともなりました。その星の中央に、啓光学園の頭文字「啓」の字を配し、永遠に輝く校運を祈念すると共に、「光り」「輝き」の意味をもつクラレットの文字をその名にもつ、聖クラレット大司教が創められた「キリストの光をかける学園」を象徴しています。



学園章 (夏期)

初期キリスト教時代「魚」を画いてキリスト教のしるしとしました。

○型は世界を示し、上段は魚を図案化したもので、全世界の隅から隅に拡がるキリスト教を示します。二つに区画されている下段は、上段と一つになって○を形成しています。

これた、父と子と聖霊の三位一体を象ったものであります。二つの●印は、これを水平位置になるよう校章を回せば魚の目になり、目標を見つめる前進の姿を示しています。

原案 小野 教 制作 下山正三



⑥

新入生はたった十人 アクビする？鉄筋校舎

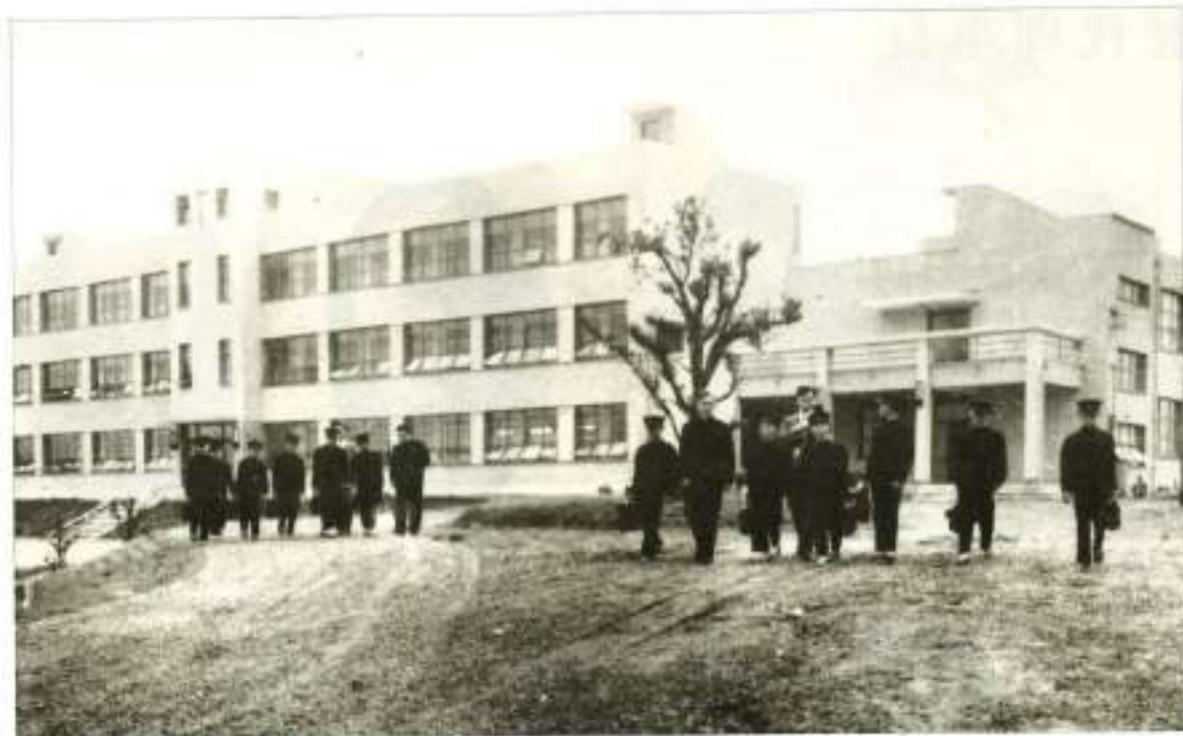


これが生徒の全部(入学式後スザン神父の話聞き)

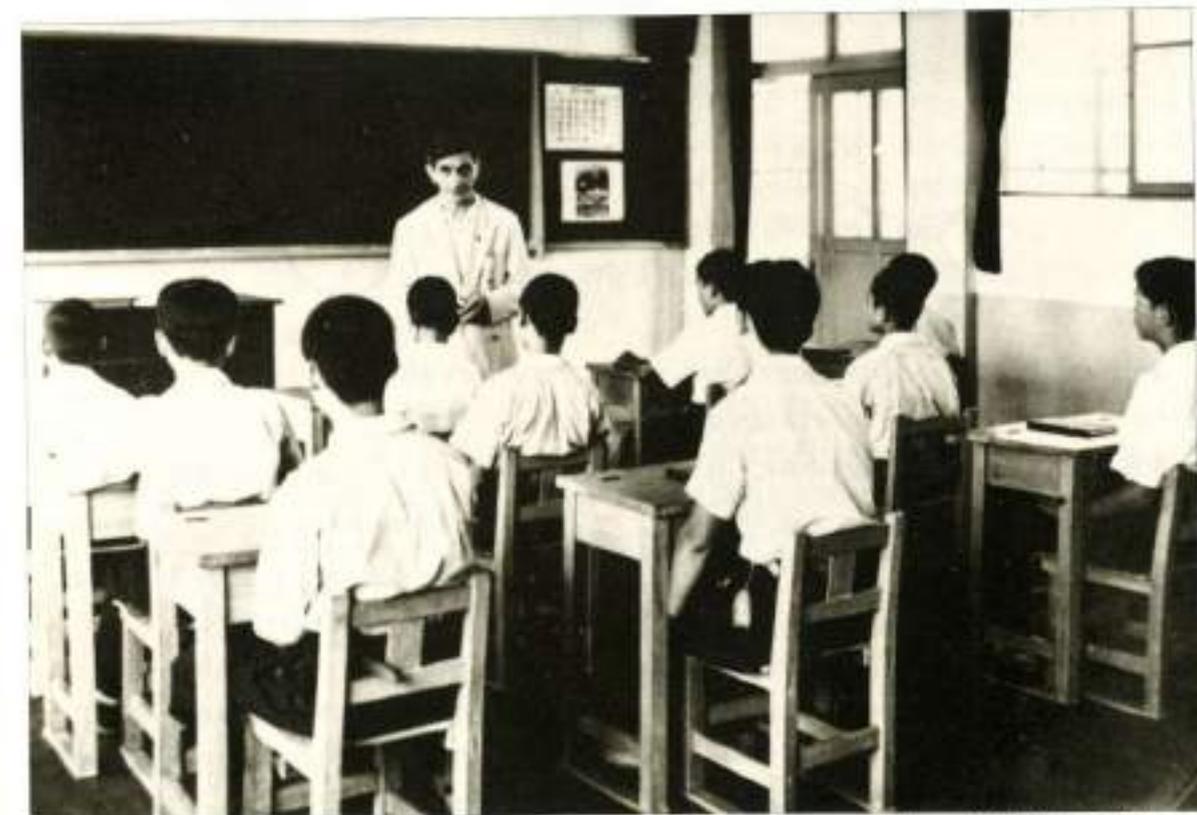
☆ 枚方市の丘陵地帯にある公営アパート群の一角に、この春、スマートな学舎が生まれた。約一万二千坪の敷地に、鉄筋コンクリート二階建て二階建が延五百五十坪、カソリックの聖光学園中学校(ルイス・スザン校長)だ、と云って、春の日はまっさらのガラス窓に明るく光る中で、八日午後開校最初の入学式を行ったが、新入生なんとたった十人。しかもこの生徒たちは、受験生十五人の中から算数、理科、国語の学力試験でよいいにかげられた数だけだという。そんなわけで、先生の方も目下はスザン校長以下八人だけ。入学式の手と爪をどした校庭にひっそりとたたまった生徒はもてるん、付添いの親たちもなんとなく落着かぬ面持ち。

中学階段を高校に振り向け始め、青銅、講堂にまで生徒を押し、この取寄数はさあにふえ、平均五十人程度になるという。有様だ、浜田町教育長「小学と中学の中の塾だ」とこの、もつ(府私立中学高専連合会の話)校と違い、授業時間の長つ中学公立になるか教員不足はまことに、これは二階建てはほつきなうて

☆ 定員百人を募集して、こんなことになった原因は、新設のミツシヨウ・スクールで名が通っていないかたといふこともあるが、学園の敷地買収に協力した市吏員らに不正があったとか、なかったとかいふ疑いも生徒募集に響いたらしい。もつとち授業料収入に頼る必要のないミッション・スクールだけに学校側も生徒の少ないのはイヤという話はない。ついでに、この校舎は二億円をかけて増築を進め、明年には小学校、三年後には高校、六年後には大学と大規模な校舎を作り上げるのだという



昭和32年4月創立当時(一期生中学一年生)



ゴンザレス神父「道徳」の授業



東側より見た校舎

回 顧

河 井 眞

啓光学園が創立25周年を迎えるとのこと、そんなに時が経ったのかと感じて居ります。私が啓光学園に勤務したのは、学校法人の設立が認可された後、中学校の開校まであと数ヶ月という時に始まって、それから凡そ5年間、第1期生の諸君、つまり井上・岩田・両先生たちが高等学校2年生の時期まででした。私にとっては25・6才から30才頃までの、文字通り目まぐるしい忙しさに終始した時期でした。

創立当初のことを回顧して少し書くようにとのことですが、正直なところ細かいことは殆ど忘れて居るようになっています。大筋のところは忘れているわけですから、忘れて居るというよりは、正確を期し難いものになっていると言うべきでしょうか。印象に残っていることについても、形のあるものや記録に残っている事柄はともかく、それをめぐる人々の言動にまで言及しようとすると、記憶が曖昧であるというだけでなく、それらを成る形で説明するのに用いる言葉が、適確なものかどうか迷います。過去についての証言というものは、こういう制約を免れることは出来ないものなのかも知れません。創立当初のことについては、不正確な私の証言よりも、創立後間もなく着任され、その後今日まで学園の動きを見守って来られた丸山先生と高田さんが記憶されていることの方が、ずっと重味があると言わなければならないでしょう。

私自身はすでに退職後間もない時期に、求められて回想めいたものを書きました。今読みかえすと気恥かしい文章ですが、参照していただければ当初の時期のことを知っていただく一助とはなろうと思えます。ここでは前の機会に言い足りなかったことを、付け加えさせていただきます。一つは、創立までの経過において特に御助けいただいた方々として、六甲学院の武宮先生、四条順学園の岡村先生、校医をしていただいた陸山・木村両先生、そして枚方教会の江馬さんと林さんの御名前を明記しておかねばなりません。今一つは、当時の状況がそれを許さなかったということはあるにせよ、学園の創立と運営に当って、私自身は積極的な構想をもつというよりも、その時々事務を処理し、当面の問題を解決することに追われていました。そのことが若し今日までいくらかでも学園のあり方にマイナスの影響をあたえていたら、関係者として申し訳けないことに思います。

私はその後ずっと国立学校にばかり勤務して来ました。国立学校の教員には、或る意味では大層広い自由度が与えられて居りますが、自分たちの学園が社会の中でどういう役割を果たすべきかについては、法令等の定める所に従わねばなりません。啓光学園の教職員の皆さんが、私立学校の特性を生かして、学園の将来について意見をたたかわせ、積極的な構想の下に学園を運営して行かれることを望んで止みません。

(元 社会科教諭)



校舎全景



第一回春の遠足 私市(S.32.5)



臨海学舎・淡路島(S.32.7)



始業前のあいさつステル神父



休憩時間のガルデアノ校長と生徒たち



創部当時の音楽部(クラブ顧問は今は故き平原先生)

啓光学園校歌

岡 省三

実は人から指摘されるまで、私は校歌の作詞をしたということも忘れていた。忘れていたという随分無責任に聞こえるけれど、校歌成立の事情を問われて、初めて、そもそもの状況を思い出し得ない自分に気がついたのである。校歌制定という重大事件なのだから、そう簡単にお引受けしたとは思えないし、さぞいろいろの意見も出されたことだろうと思うのに、他の情景は、ありありと思い浮かべ得ることがあるにもかかわらず、校歌の作詞承引の部分だけは、いくら思い出そうと努めても、完全に欠落してしまっているのである。恐らくは、当時の校長ガルデアノ神父に、例の翼子で責められて、何かの儀式にでも間に合わせなければならぬとかで、無理に作らされた拙速の産物であろう。とにかく覚えていたのは、先に曲を与えられたことと、作って行った歌詞を英語に訳せと命ぜられたことだけである。曲は何の曲かはこれも忘れたけれども、スペインの学校教育と全く無縁のものであるまい。

楽器も弾けず、読譜も思うに任せぬ私は、頂いた譜面をピアノの弾ける人に演奏して貰い、そのテンポと音域を頼りに文句を考えたのである。どうあがいてみても、明かるい、軽快な、躍動感あふれたものにはなりようがなかった。又、英語の表現力に乏しい私がどのような迷訳を施したか、それも今となっては呼び戻し得ない忘却の彼方である。タイムトンネルをくぐり抜けてみたら、いろいろと恥づかしい珍なる事態が見られるのかも知れない。

とにかく、25年という歳月は、一個の人間にとっては随分長い歳月である。それは再び取り戻すことの出来ない歳月である。一旦かいた靴は、これを雪ぐことは殆ど不可能であろう。自己の為した行為については、その責を免れることは、これも亦為し得べきことではあるまい。だとすれば、下手くそな校歌を作ったものの責任はどうなるのか。厚顔にも二番三番と書きつぐべきか。私にはとてもそれだけの勇気も力量もない。仕方がないから、次のことを提案したいのである。

25周年記念としては最早間に合いかねると思われるので、30周年事業として、新校歌の作詞を、有名詩人に依頼するか、あるいは、現職職員や卒業生から広く公募すること。ついでに応援歌なども考えて頂けたら有難いと思う。

どうも私自身の見事な忘れっぶりから考えて、一時の間に合わせのつもりでお引受けしたのではなかったらうかと想像する。一刻も早く作詞者岡省三の名は抹消して頂きたいと願う所以である。但し、曲は新たに作り直されているので、作曲者平原先生の名は永遠に残して頂かないと困るのである。

以上、啓光学園草創の頃の、私の恥づかしいお話の一つである。

(元 国語科教師)

25周年を迎えて

丸山 哲司

振り返って思い出されること、それが些細なことでも、迎も懐しく、他人にとって他愛ないと笑われることでも、自分にとって忘れ難く大切なものであることが多い。初代校長ホセ・ガルデアノ氏が「京都にも、大阪にも立派なカトリックのミッション・スクールがある、そこでその中間の校方に理想の中学校、そして高校を……」と将来の抱負を語る師の自信に満ち、人を引き付ける余裕あるその風貌に共感を覚え、赴任を決意したのが1959年3月(創立3年目)であった。

当初の学園の多忙さは、一口で言い表すことは不可能な程であったが、現今のそれとは質的に異なる。丁度、高校設立認可を受ける年でもあったから、授業時間外の官公庁や学校関係への出張も多く、めまぐるしい毎日であった。

20有余年の記憶を辿るのは難しい。しかし、自分が情熱を持って打ち込んだあるものが、幾歳月経った昨今になって、その真の価値が評価されるのを見聞するときの満足感、そして又、思いがけなく訪ね来た卒業生の今の顔と昔の顔が一致しないままに、昔を、そして今を語り合うとき、四半世紀という学園の重みをひしひしと感ぜずにはいられない。

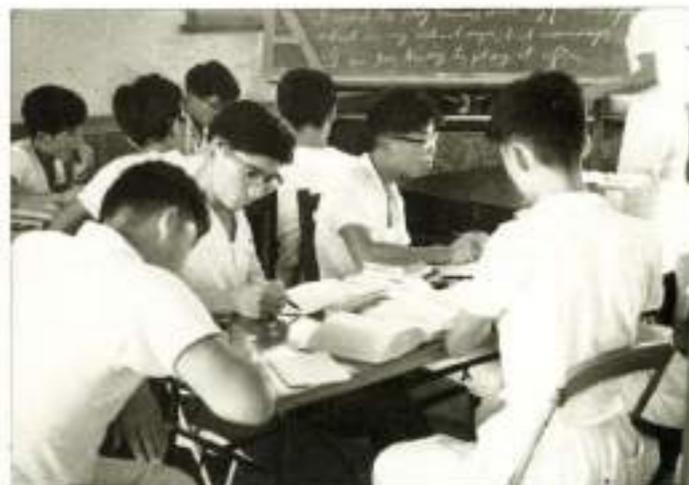
赴任後記念に植えた校門の桜の幹の太さにも、私の人生の大半が学園と共にあるのだと思うと感無量である。

25周年を基に、カトリシズムに根づいた学園の発展の輪が次々と新しい世代へと大きく広がらんことを祈る次第である。

(社会科教諭)



二期生卒業写真多くの外人神父(先生)の顔がみえる



一期生高三夏期受験合宿
(淡路島)

生徒と共に20年

清水 輝雄

啓光に勤めて20年になります。私が来た時、高3を教え、その高3が第1回の卒業生ですから、卒業式の数が私が勤めた年数になります。井上先生、岩田先生を教える機会に恵まれました。その初めて来た年の夏、高3は一クラスだけでしたので、全員が受験をひかえて、淡路島の江井という所に合宿して勉強しました。2週間だったと思いますが、私も、新米ながら、英語の指導に1週間、起居を共にして生徒と一体になって夏をすごしました。2回生の時は教員でありました。共に1・2回生は1クラスということもあって、こんなことも可能だったのでしょうか。

生徒会の顧問をしたのも私にとっては印象的でした。当時の生徒会は、生徒指導部とは分離しており、自主性の強いものでした。文化祭の最終日、審査発表までの少しの時間が空白になるというので、前日に知り合いの大学の教授を講師に頼んだこと、また、ある女子高校のフォーククラブが文化祭に友情出演してくれることが決まり、プログラムができてから断られ、相手校の生徒顧問、教頭、校長にと熱心に頼みによって出演が実現したことなどは、私には強烈な思い出です。リーダーズ・キャンプが軌道に乗り出した頃で、石清水八幡宮や、粟生の光明寺に泊り込んで話し合った生徒の熱意は、今も私の心の中に燃えつつづけている様です。こういったことと相前後する頃、学生運動のさかんな頃がありました。啓光でもその影響を受けて学校の中が騒がしくなった時がありました。生徒会の顧問をしていた私は、あることで生徒と対立し、体育館で、全生徒の前で、代表と激しく議論したのは、今でも忘れられません。あの純粋さと厳しさは若者のものではないかと思ひ、今では敬意さえ表わしたいぐらいです。

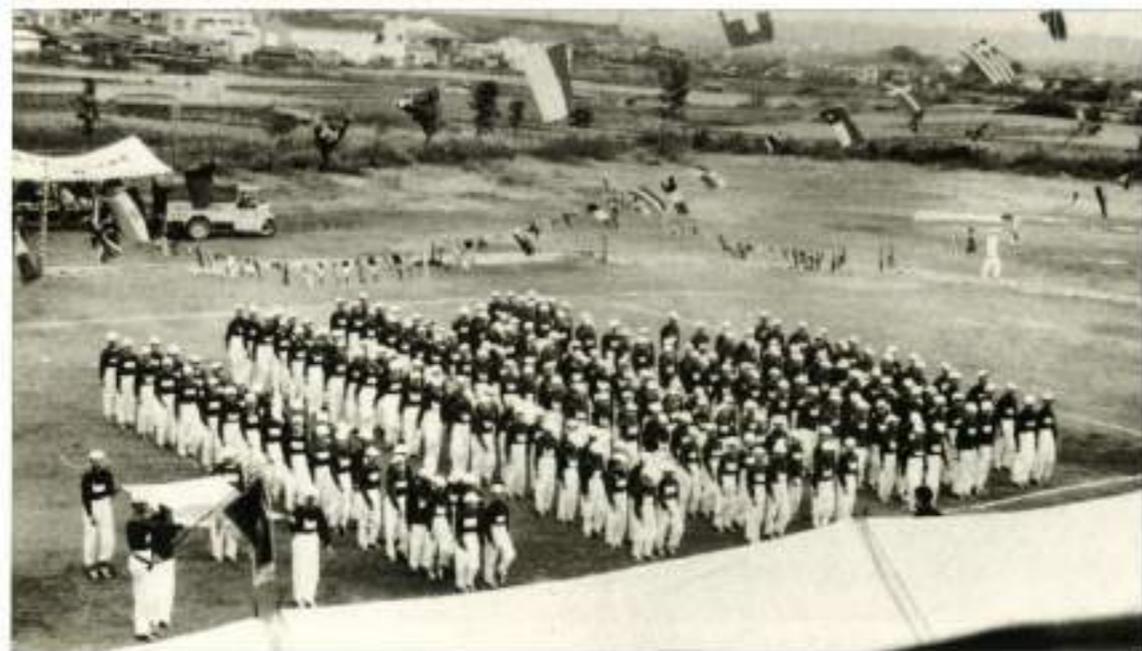
(英語科教諭)



「スペイン語」授業中のスーテル神父



第一回体育祭



駐日バチカン公使ドミニコ・エンリッチ大司教来校



三期生全員



中学校第一回卒業式 昭和35年2月29日



高校第一回卒業式
昭和三十八年二月二十六日



北九州方面
第一回修学旅行
昭和三十六年十一月



稀有な体験

一期生 岩田宗親

昭和32年2月、酪寒の朝であった。現在の4号館1階の教室で、我々は第1回入学試験を受けていた。閑散とした室内に受験生は8・9名、我々は皆太平洋戦争末期の生まれで、極端に人口の少ない学年であった。身も凍るような霜さの中で、全員が足元に小さな丸火鉢を抱えて入学試験を受けたのである。稀有な体験の始まりが、これであった。

4月入学直後から、新聞社がくる、TVカメラがくる。テレビの受像機すらもまだ各家庭にはない時代であった。記事は「もったいない話」として我々の写真とともに新聞紙上に掲載された。生徒10名に教師3名、神父数名、新築の校舎と司祭館。丘を切り開いたままのコースからの黒い運動場とはいえ、広大な敷地にスペインからキリスト教宣教を旗印に若いクラレチアン会が建てた最初の学園であった。国破れて12年、未だ戦後の傷跡も消えやめぬこの時代に、牧方祭野の小高い丘の一角に菜の花と雑草に取り囲まれた異国情緒の世界が忽然と現出していた。

授業もまた奇異であった。「公教要理」「英会話」「スペイン語授業」「道徳」各国の個性あふれる外人神父。その変わった習慣や物の見方に我々は大いに戸惑い、驚き、反発した。しかし彼等の多くは純粋で、情熱的で、称賛すべき、勇気ある人生の実践者だった。その言動は幼ない子供心にも様々な感概を残している。中学時代、それは草創期ゆえの厳格主義と試行錯誤の混在した時代であった。しかしそうした中でも、我々は稀少価値を楽しみながら比較的のんびりと自由奔放に成長したようにも思える。何と云っても、我々が一番の「お山の大将」だったのだから。

クラブもまた我々が創り出さねば、何にもなかった時代であった。陸上部、卓球部、テニス部と、我々は手っ取り早く少人数のクラブから創り出した。中学3年の時であったか、初めて運動会を体験したのであるが、何と我々は「うみのほし幼稚園児」数百名と万国旗たらして合同運動会をやったのである。草創期にまつわるこうした笑い話・苦心談は山ほどある。「神学生」という一群の級友がいた。後に多い時にはクラスの半数にも達したが、彼等もまた我々以上に啓光草創期の稀有な人生の体験者だったにちがいない。我々は多くカトリシズムの何たるかを体得しえず、カトリック教の功罪の議論にばかり終始した親があったが、しかしそれでも、その厳格な精神の一端には触れたような気がしている。岡・河井・故岡村の三先生とガルデアノ校長は、我々には永遠になつかしい名前である。若くして学園創設という難事業に携われたその御苦労は、今、とても筆舌に尽しがたいことであろう。しかし、これもまた人生の一つの稀有な体験だったにちがいない。

新しい時代には新たな啓光学園が新生すればいいのである。過去の栄誉にこだわる必要もないであろう。ただ古き卒業生の心の底には、わが栄えある学舎「啓光学園」が傲然として聳え立っていることもまた、否定しがたい事実であろう。

花のごと世の常ならば過ぐしてし

昔はまたも返り来なまし

(古今和歌集・説人知らず)

(国語科教諭)



スキー学校

伊吹山登山



臨海学舎



「白馬ヒュッテ」建設をめぐって

小林 弘志

今回の投稿依頼を機に、私にとっての「啓光」時代を位置づけて見た。結論は「あの10年間こそが青春時代だった」ということになる。

理由は、時期もさることながら、いまは同窓生として各分野で活躍されている「生徒」や「教育」を肴に酒をくみ交したかつての同僚との本音の付き合いを通じ、血肉として吸収した多くのものがいまなお私を支配しているからである。大変貴重な人生の一時期だった。学園への赴任が昭和37年、この年に中・高一貫体制が出来た筈である。当時は学園自体が若かったこともあり、若輩の我々にも学園づくりと称してかなり好きなことをやれた時代であった。私にとってその最たるものは「白馬ヒュッテ」の建設なのだろうか。

事の発端は38年2月頃、練習を終えたクラブ員とストーブを囲んでの雑談である。2期生を中心に結成されたワグネル部の2年目を終ろうとしていた頃である。卒業してからも昔んなが集まれる「我が家」を自然の中に持ちたい、それが動機だったと記憶している。そんな『夢』が俄かに走り出した。

40年春、結成2年目のOB会の席上、酒の勢いも手伝って、来夏を目指して着工しようという構想が決議されてしまったのである。本来、非現実的な計画にはブレーキをかけるのも顧問である私の役割の筈であるが、それを自ら放棄してしまったのだからもう止らない。土地購入費及び建設経費を除きすべては自分達の手弁当という具合の計画である。建設地については色々物色したが白馬山麓に決めた。クラブ結成後初めての遠征合宿が白馬縦走だったからである。土地購入に当っては釣田先輩の旧友の故切久保武氏（白馬村切久保「岳園荘」先代当主）に大変ご尽力をいただいた。資金は半分を学園を口説いて出して貰い、不足分は教師仲間、父兄、卒業生有志からのカンパで補った。設計段階から落成に至るまでの労力は、ワグネルOB・現役の諸君にその間の生活費自己負担で提供して貰った。7月中旬から約1ヶ月に亘る飯場生活を経て素人による文字通り「手づくり」の「啓光白馬ヒュッテ」が完成したのである。昭和41年8月16日のことである。

それから6年目の夏、第2期工事として増築業を行なった。現在のヒュッテの姿はその時のままの筈である。資金調達と労力は前回とほぼ同じ要領だった。翌春、私は学園を辞して郷里の仙台に帰った。以後、時間的な関係もあり、足が遠のいているが、あの時の仲間がいまも定期的に足を運んでいると聞き、大変嬉しく思っている。多分、彼等は自分の「青春」をそこに確めに通っているのだろう。いつか私ももう一度訪れ、奇麗な自然に耐えて頑張っている我々の作品をこの目でしかと確かめたい。

我々にこんな体験の機会を与えてくれた学園と関係各位にあらためて感謝の意を表するとともに、今後益々の発展、ご健勝を祈る次第である。また、すでに他界された諸先輩にはこの場を借りてご冥福をお祈り申し上げたい。

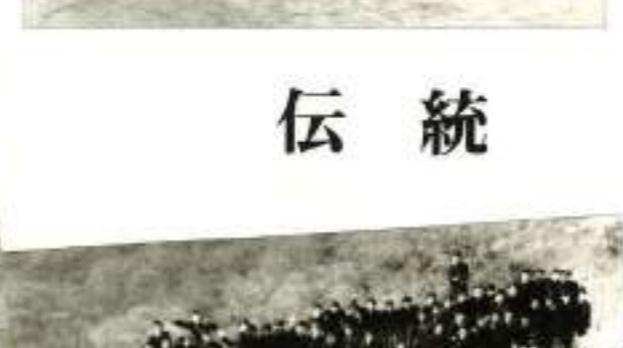
(元 社会科教諭)



啓光「白馬ヒュッテ」増築中のワグネルフォーゲル部員OB



冬の啓光「白馬ヒュッテ」



伝 統



人・人・人… 顔・顔・顔…
「一粒の麦」の創立の心と伝統を世々に受け継いで今日に、さらに明日への発展に、輝やかしさを添えた魂の苗床である。





昭和38年10月体育館・啓光会館落成



昭和35年3月小神学校 落成
(現在のクラレチアン・レジデンス)



体育祭



文化祭



光あるものを求めて

古谷 昭雄

枚方禁野の丘陵地帯にひととき高くそびえ立つ学会に私が赴任したのはちょうど昭和38年1月8日、3学期の始業式であった。校庭に高校3年生から中学1年生までどれほどの生徒数であったであろうか。記憶は定かではないがこじんまりとまとまった少人数であったことだけは覚えている。制服をきちんと身につけ礼儀正しいいかにも生徒らしい雰囲気のみながっていた。あと1ヶ月足らずで高校3年生が卒業するという、すなわち第1回卒業生を送り出す歴史的な第1ページが正に開かれようとしていた時であった。私が初めて受持った理科の授業は中学2年生であったが授業中での整然とした態度、熱心な質問など授業全体に活気が溢れ、いかにもやりがいのある学年であった。生徒1人1人が何か啓光生としての誇りを持っていたように感じられた。

12年間の在職中に忘れることのできないことの1つにバドミントン部の顧問をしたということがある。新しくクラブを設立するという事は並大抵の努力では出来ないことを体験した。体育館はまだ新しい状態であったが、バドミントンについての施設は何もなかった。約10日間程毎日夜遅くまで作業が続いたであろうか。待望の4コートが出来上がった。待ちに待ったコートである。部員をはじめ私も感激で胸一杯になった。このことは今も脳裡の奥深くに刻みこまれている。この完成した喜びは何物にもかえ難いものであった。部員の協力一致がここに一つの実を結んだのである。いろいろ言うことよりもまず実行、行動する。この精神が部にみなぎり、このことが部運営の柱となり励ましとなったようである。部創設3年目にして早くも近畿大会出場という輝かしい栄誉を残すことができたのは、部員全員の一致協力したお陰である。この出場が契機となり、以後連続出場という偉業を成し遂げたのである。このことは部の発展のためにも、また啓光学園の発展のためにも懸命ながら尽力を果たしたのではなからうか。その当時大活躍した諸君も今では社会人の中堅クラスとして立派に大役を果たしている。毎年一度のOB会は私を若きありし日のエネルギーに動いた思い出の中に誘い入れてくれる。本当に楽しみにしている日である。その場でいつも話題になるのは啓光学園のことである。今はどうなっているのか。どのような先生方がおられるのか。校舎、施設等は どうなっているのか。先輩、同輩、後輩はどうしているだろうか等、次から次へと飛び出し、話は尽きない。

啓光学園は発展させるべきエネルギーが多く蓄積されているように思える。そのエネルギーを教職員はじめ生徒諸君と一緒に一致協力して立派なカトリック校としてたえず前向きな姿勢で物事に対処していただきたい。キリストもその教えの中に教育の必要性を弟子達に伝えておられる(マルコによる福音書第16章15節から18節まで)。明日の啓光学園を築き上げるよう、知育、徳育、体育の面からも他の模範となるべきものを示していただきたいと願うものである。学園創立25周年を迎えるにあたり心よりお喜びを申し上げます。(元 理科教諭)





赴任の頃

遠井方子

何という殺風景な。校門を入れて緑の少ないことに驚いた最初の印象は、今でも寒々とした光景となって、思い出すことがあります。校門わきの桜の木も細く小さくまばらで、2月頃ということもあって、なおガランとした風情であったのでしょう。

校門の桜は、今でこそ大きく枝も伸び、頭上を覆うほどにもなっていますが、その頃は緑の羽の還付金で、毎年何本かずつ植樹して桜並木にしようという計画が始められたところでした。この釣田先生の構想をうけて、その後園芸部がなくなるまでの数年間、顧問として苗木を植樹してきましたが、その割に効率悪く枯らせたりの育ちが悪い等で、校門前が整備された頃らにちょうどとってかわり現在に至っています。

私が啓光に来た年の新任教員は7・8名。女性2人を含む混成チームでした。この頃、啓光教師陣は移動がはげしく不安定の真只中と言ってよい時でしたが、この出発したての同期生も、1年後には半分位になっています。

当時、数学科をとってみても、専任は主任の遠山先生、若手の上田先生、そして私の3名でしたが、二学期になって急に遠山先生が辞められ、その年度末には、又突如上田先生も郷里へ帰られて、1人残された私が1年後に教科主任という有様でした。この頃の教員移動の異常さは、講師の多さと共に新任にとっては大変ショックなことでした。

東北新幹線開通で思い出したのですが、その頃東海道新幹線が開通したように思います。その日の中学授業中、突然、生徒達が窓際により、ひかり号だ、超特急だ、と一時騒然となるハプニングがありました。彼等は高規あたりを走る時刻を計算し、淀川べりの高見から一目みようと思っていたということでした。

冬期の教室にストーブが入らなかったのもさすが男子校と珍らしく思いましたが、一方職員室では大きな石炭ストーブが赤々と燃え、ストーブ鑑会談に花が咲いたものです。

20年近くたった今では、教室にもガスストーブが入るようになっていますが、職員室では、暑いにつけ、寒いにつけ、エアコンが壊っています。

(数学科教諭)



啓光学園中学校の思い出

津崎 史

創立25周年、おめでとうございます。

私が啓光学園に在職したのは64年から73年までの10年間、私の大切な青春でもありました。

6年間一貫教育という大きな柱が、中学生の減少により、崩れかける時期でした。4クラスから1クラスに、それはあっという間のことで、中学校のあり方について、真剣に考えざるを得ないときでした。高校の付属物ではなく、授業も、行事も、生徒会も生活指導も、すべて、新しい角度から検討されていきました。1クラスの人数の少ない利点を生かして、いきとどいた授業をしよう——塾よりも少人数のクラスでは、1人ひとりがよく見えて、かなり密度の濃い内容になっていたでしょう。

そんな中で、手づくりの修学旅行、文化祭への参加、卒業アルバム作りなど、自主的な創作への成果をみたことは、私にとっても、貴重な体験であり、思い出になっています。特に、中学としてはじめて修学旅行をしたこと。業者のコースにのるのではなく、日程も、コースも生徒と共に地図と時刻表をみて考え、旅館のマイクロバスや、路線バスを乗り継いで信州の旅は、印象に残っています。山登りに汗を流し、朝霧の高原におり立ち、湿原の花を愛でる、その一つ一つに自分達が主体なのだという熱い思いをかみしめました。高校受験に必死にならなくてもよいことが、こうしたのびのびした生活経験になってあらわれるならば、それは、中・高併設校のすばらしさであり、受験体制のひずみの中に苦慮する公立中学校の及びえない利点になるものと思います。

卒業してすぐ、思いがけず男子校に就職し、日々、悪戦苦闘しながらすごした10年。そこで結婚し、親となり、やっと私らしいスタイルを見出したころ退職してしまいました。今、新しい職場で、2度目の青春を歩みはじめています。ことあるごとに、私を育ててくれた啓光学園を思い出し、それが大きな支えになっています。

私学の果たす役割の大きさと、私学の進むべき道とを考えると、25年の重みをもつ啓光学園が、更に発展し、魅力あふれる学園に成長されます様、祈ってやみません。

(元 国語科教諭)



加藤 剛 男

規則やその考え方などは、その時々によって変わっていくものであるが、創立25年を迎えた啓光学園にも生い立ちの間に消えていったいくつかの学園の特徴を表わすものがある。昭和45年代前半、当時の生徒の好不評は別として、次のこともなつかしさの中に残っている。

学園の冬の制服には帽子と黒の革靴、カバンが一番よく似合う、どのような経過で制服が決められたかはよく知らないが、現在中学生に残っている帽子、カバン等の制服は高校生にも適用されていた。成長のはやい年頃なのでむずかしいことであるが、きちんと着こなした制服姿は見映えがして、御父兄が、自分の子どもながら制服を着た姿は急に大人びいて、りりしく感じます。とよく言われたものである。ただ当時の京阪電鉄の制服とそっくりだったので、高校生などはよく車掌と間違われて困った経験があったかも。

現在暖房器具を使わない家庭は稀であろうが、冬になっても教室にストーブがないのに気付いた時はおどろいた。冬は寒いのが当たり前でわざわざ暖めると頭のはたらきが鈍る、とかなんとかいって、かじかんだ手で生徒が勉強していたのを思い出す。職員室には真っ赤に燃えた石炭ストーブがあってベルが鳴ってもまわりから動かない教師には少々つらかったかも。

2限の終了ベルが鳴ると、いかにはやく着替え、混雑するロッカーを通過してグラウンドに集合するかが大きな問題だった。雨が降らないかぎり毎日、中間体操と称して啓光体操をグラウンドいっぱい広がって元氣よくやっていた。集団の行動がなかなかできない今、この体操のよさをよく思い出すが、教師も参加するので、2限が終わると生徒に遅れをとらないよういそいそものである。車による通勤の多い現在、教師に必要な体操かも。
(国語科教諭)



中間体操

中学生の生活と考え方



啓光学園中学校生徒会

日暮れもせまってきた頃、
備たらは階段を下りる。
まだ昔、入学したての、
賑わいだ。
足取りもかるく、
みんなの胸は希望にもえている。
靴をはきかえて運動場に出る。
バスに遅れないような停留場へ走っていく。
「ギックギック」、靴がぬれて、
うまく走れない。
あやうくバスに飛びのつた。
バスは改方駅へと急ぐ。
駅に着くと、まず一安心する。
電車がホームにはいると、
また競争が始まる。
みんな夢中で電車の中にかげこんだ。
そのとき、やっとほんとは安心できる。
電車がゆっくりと動きだした。
腰をおろして窓を見ると校舎が見える。
夕日に浮かんだ、小高い園の上に建っている。
啓光学園の姿を見ると、
明日への新しい希望がまたもえてくる。

啓 光 学 園

啓 光

啓光学園中学校生徒会

6

禁 野

1965

作 品 集

第 3 号

1965

作 品 集
第 2 号
1964

作 品 集
1963

啓 光 学 園 中 学 校

作 品 集
第 4 号
1966



啓 光 学 園 高 等 学 校 第 三 回 卒 業 三 年 A 組

昭和40年(1965)4月1日付で、当学園英語科教諭として奉職を許されて今日に到るが、その年はベトナムに平和を！と訴えた1ページ大の意見広告をベ平連がニュー・ヨーク・タイムズに掲載したり、さかのぼっては、教科書検定に関する賠償請求の民事訴訟が家永三郎により起こされた年でもある。

なぜ外国語・英語を学ぶのか？勿論、私自身の課題でもあるが、敢えて一言でいえば「一つの外国語を知らないものは、自国語も知らない」というゲーテの言葉に尽きると考えるが、自ら求めて積極的に外国語・英語学習に取り組む姿勢が極めて乏しい生徒諸君が、残念なことだが、すくなくならず、特に昭和50年(1975)代以降、漸増している状況下にあっても、古い言葉だが「習うより慣れよ」家庭学習を徹底させることを生徒諸君に要求したい。授業を大切に「授業で勝負する」を第一義と考え、ひたむきに実践するならば、当学園の明日への羽搏きも軽く、展望も明るくなると確信している。

当学園の卒業生の結婚披露宴に招待されたり、拙宅に連れ立って来訪される卒業生諸君をみるにつけ「君たち自身を大切にしてくれさえすれば、たとえ君たちが何をしても、ぼくにつくしてくれたことになるのだ」と、竹馬の友クリトーンに対して答えたソークラテスの言葉を反芻する次第である。

ソークラテスの死に際して晩を閉じさせるまで、色々と身辺の世話をやいた老友クリトーンが何かしてほしいことはないかの問いに対する返答であるが、私たちは真の意味における教育者の姿をみると同時に、彼ソークラテスにおいて始めて教育ということが意味をもったことを、くりかえし考え味わうべき節目だと考える。
(英語科教諭)

41年から47年までの6年だけの勤務であった。先ず感じたのは先生方の異動が公立校に比べて少ないということであった。

これは私学の長所である。腰を据えて教育に没頭できる。実に貴い。が、この長所は同時に大きな落とし穴でもある。人にもよるが人間多くの場合押れるものである。そして己の経験を唯一無二のものと考え易いのである。自分の些々たる経験が世界の一切だと思いがちなものである。そのような発想と行動とは往々にして独断と偏見とに陥り易い。教壇人として充実するためには、私立学校の間でも何とか先生方の交流があれば考えたのである。

始めの頃の生徒には好ましい青年が多かったが、退職する頃にはうとましく思う生徒がぼつぼつ現われ来た。好ましく思ったのは、とにもかくにも殆んどどの生徒が、物学ぶ気分にかけていた。クラブ活動にも教室学習にも、ひたむきであったように思えた。文化祭でも体育祭でもそれなりに一所懸命だったようであった。学校生活がよきバランスを保っていた。「楽しい学園」であったと思った。

時代のせいもあるが生徒の型が変わって来た。クラブの猛者必ずしも教室での良き生徒だとは言い切れぬようになって来た。運動選手で、あたかも己が特権階級であるかの如く振舞う者がふえて来たように思ったのは私の錯覚であったろうか。予習復習はおろか、教室で居眠って何が悪かろうという偽悪者が目立って来た。学園がグレシャムの法則に支配されて来たようだった。

いろんな意味で思い上がりは戴けない。老練だからというのはいけなしいし、我こそは最も進歩的なりと自惚れて意識過剰になるのも戴きかねる。お互いに欠陥多い人間である。それぞれに他の人の持っているものを、謙虚に吸収するように心掛ければ教壇人としては、より充実し、文字通り生徒から「恩師」と呼ばれるようになる。

幸いに数多くの学校で教壇生活を送った私は、変った地域との接触も出来たし、種々の型・人生観・世界観の先生方にも、又、様々の価値観を持ち、様々な性格の生徒にも接することが出来た。私にとって貴重な肥料であった。

以上、あくまでも管見である。恐らくは独断と偏見とに充ち満ちていることと思う。(元 国語科教諭)

啓光学園だより

啓光学園 中庭 啓光 啓光 エル・サンチエス

この小冊子は
昭和四十五年十一月、
啓光の片・水・金の三日
巻末(三三三)にわたって
ラジオ放送から放送したものです。

啓光学園だより

マヌエル・サンチエス

数年前のクリスマス・イブに、二人の男が、バーか飲み屋でいい気持で話さばらったの通り道、ある教会の前を通りかかきました。すると、中から大勢の人たちの光気を漂わせ、聖歌が響き、聖歌にはあかあかと灯がうつっているではありませんか。こんな夜に何事だろうと、二人は中を覗いて驚き、叫びました。
「ここ、聖歌だ。教会でもクリスマスをやっているぞ。」

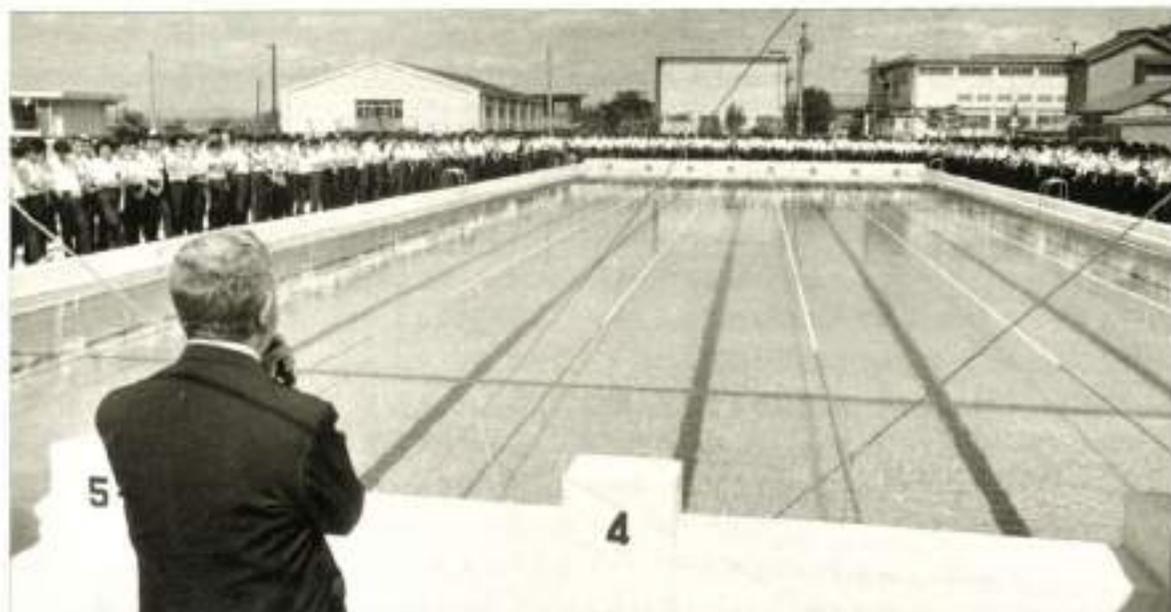
啓光学園では授業の中で聖歌を教えていると聞いて、「へえー」と驚く人があつたら、クリスマスに際しては聖歌と何となく関係があるように、聞くほうがかかると言わねばなりません。なぜなら、啓光学園は聖歌があつての学校だからです。では聖歌の聖歌とは一体どんなものなのでしょう。聖歌の言葉をただ知るだけではありません。また先記しようなんていうものでは、もちろんありません。

啓光25周年記念に思う

岩井 忠孝

昭和37年に啓光に就職、当時新聞で20名の卒業で少人数教育で新しい学校だと話題になる。給料も一号法良く将来性があるということだった。当時、初代校長はガルデアノ神父であり、日本語が日本人以上に上手で、手腕家であり、弁舌は迫力があり、人間的魅力もあった。釣田教務主任も仕事に意欲があった。神父が生指部長であり、遅刻者は門に入れないで追いかえされた。生徒指導も厳しく、転校もさせた。能力別編成で中学の生徒数も多く、良く勉強した。高校は少なかったが、有名大学にも入った。聖人の祝日には体育館で全生徒、教員がミサを受けた。その後個人の信仰の自由を尊重して、強制しなくなった。卒業式には神父が英語で祝辞を述べた。神学校で数名の生徒が寄宿舎生活を送った。又スーテル神父が私市で野外パーティーを開いた。又、37年度に組合が出来、設備教育条件について改善の交渉をした。神父の校長教員の移動が多く、人心の不安定を免れず、教師団の意思の疎通に欠くところがあったように思う。西洋的な合理的な考え方と繊細な日本的感覚との相違からきたものだろうか。今後、キリスト教的愛によって、これらは克服されることを期待する。私も今年で教員生活21年目を迎え、父母の会より表彰を受けた。定年を意識する年令に達し驚いている。社会科の教師として全科目を教えてきたがお互いの連絡ができ、社会というものが分りかけてきたような気がする。啓光25周年に当り、人間、生活環境が大きく変り、教育も変わろうとしている。しかし、反面本質的な啓光独自のものもあるような気がする。これらを今後生かしながら、明日の啓光へ飛躍するきっかけになれば幸いだと思う。

(社会科教諭)

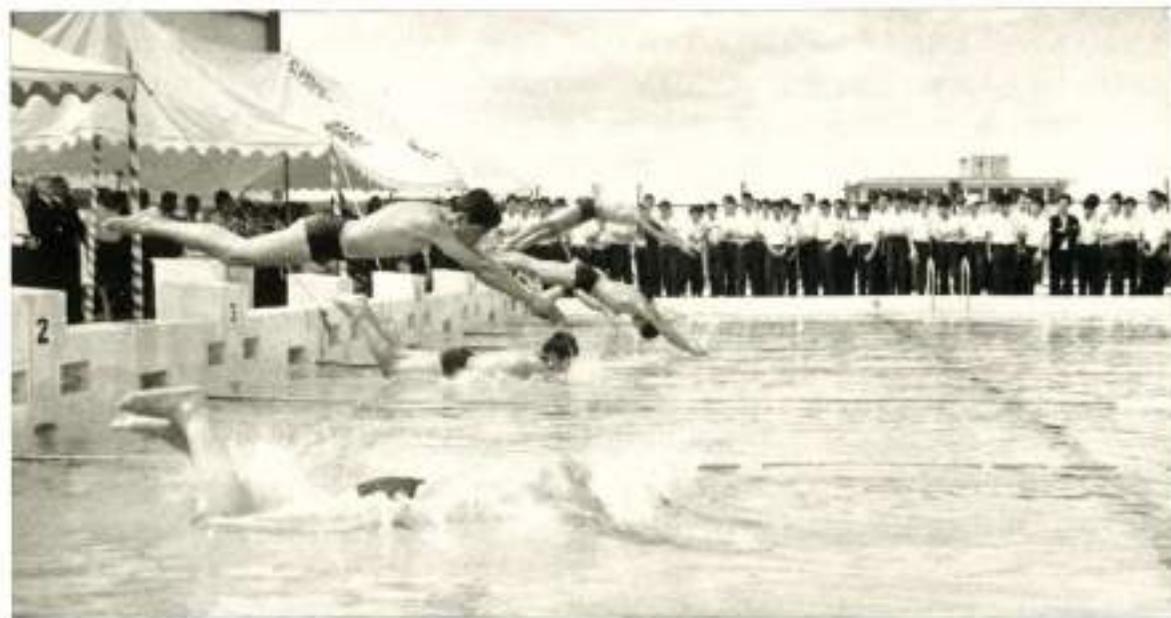


プール落成祝別式



創立十周年記念
プール完成(50米)
(S.42.5)

プール開きの初泳ぎ



初めて啓光学園を尋ねて 釣田正哉

昭和35年2月15日(月)の朝だった。空の青々と晴れ上った気持ちのよい朝だった。京阪枚方市駅からバスで、市民病院前でおけると現在見る如くすぐ啓光学園があった。左右にぽつんと立っている啓光学園とある門柱の左側は小さな幼稚園で右側はもと畑であったらしく一米半ばかりも高くなっていて雑草が生い繁り、その奥は急斜面の雑木林で、塀も、今見る桜並樹もなく、荒野にも近い感じだった。正面左手に1棟、3階建ての校舎がポツンとあるだけで、他には何の設備もなく、校庭は広く思われたがまわりは全たくあけっぱなしで、塀も柵もなく、どこからでも出入り出来る状態にささか唖然たるものがありました。校庭の北はしには4-5軒の農家が点在し、農家をとりまいて畑があり、畑の間に水溜りと言った程度の小さな池が点綴し、池のおたまじゃくし、蛙、小鯉が生徒を喜ばせました。公立高校の整備された校舎、校庭を見られた眼には何とも異様な風景でした。

校長ホセ・ガルデアノ神父さまにお会いしましたが、顔る淡白な方で後に知った事ですが同時に亦痛快とも言えるお方でした。4月から高校を開校するにつき明日からでもその準備のために出勤せよと言われ驚きました。教頭の仕事、教務主任の仕事から、校長に日本語を教えることまで仰せつかって退去しました。

ラグビー部について、啓光学園ラグビークラブは昭和42年第47回全国高校ラグビー大会大阪予選Aブロックに於て大和川高校を9-6で破り43年正月の花園に於ける全国大会に出場する栄誉を得ました。全国大会では1月1日の1回戦に対岐阜高校(三枝代表)に16-9で勝ち、1月3日の2回戦は対新田高校(北四国代表)に11-16の1ゴール差で惜しくも敗退しましたが、当時を思い出し、今後の発展についていささか述べたいと思います。

昭和37年9月同好会として発足し、38年4月顧問を丸尾先生にお願ひし、部長を野崎寿彦として部を発足しました。此の頃中学部生徒も加わり部員約12・3名。39年4月丸尾先生帰郷(熊本)につき顧問釣田正哉となり、夏はこの年以來例年白馬山麓に合宿練習を行い漸くクラブらしきものとなって来ました。

42年、顧問西山良一先生、高校顧問藤井主計先生、同釣田正哉、部員は30余名。この年の冬の近畿大会には大阪予選6回戦(優勝戦)に八尾を35-3の大差に破って優勝し、漸く自信を深め、近畿大会代表校戦では2回戦に名門同志社岩倉に19-3で破れましたが、続いて行われた私学大会には4回戦準決勝まで進み、国体予選では同じく4回戦準決勝まで進みました。そして、42年第47回全国高校ラグビー大会予選Aブロックに於てシード校として3回戦より出場し、成器、大工大高、寝屋川を連破し終に決勝戦に於て大和川高校と対戦しこれを9-6の接戦に破り、Bブロック優勝の天王寺高校と共に花園グラウンドに出場の栄を獲得したのであります。

創部以來僅か5年にして全国大会出場の栄を得た事は当時大いにたたえられました。近年大工大高の台頭に会って大阪の各高校は同様に連敗が続けていますが、本年(57年)啓光はさき頃の近畿大会大阪予選Bブロックに於て宿敵淀工を12-4で破って優勝し、久方ぶりに来る58年正月に於ける我が啓光ラグビーの花園出場が期待されているのは嬉しい限りであります。

(元 国語科教諭)



感謝状

啓光学園高等学校 殿

貴団体は日本万国博覧会の催し物に
参加され日本万国博覧会の成功に多
大の貢献をされました
ここに記念品を贈り感謝の意を表
します

昭和45年9月14日

日本万国博覧会協会
会長 石坂泰三



日本万国博
(S.45.7.31)

日本万国博パチカン・ナショナル・デーお祭り広場に出演のコーラス部



「聖クラレットの生涯」発刊 (S.51.10)
著者 小野 教

小野教校長叙勲
勲四等瑞宝章
(S.54.11)



クラレチアン会総長アントニオ・レギサ神父来校
高校第十四期卒業式に臨席 (S.51.2)



3号館落成祝別式 (S.52.3)



初代
岡田基男



二代
三ッ橋四郎



現会長代行
井上陸詮

歴代同窓会会長

学園の思い出

同窓会会長(代行) 井上陸詮

啓光学園を卒業して14年目を迎えると、学生時代が懐かしく思えてくる今日この頃です。啓光学園での6年間を通じて今も私の印象に強く残っているのは中学時代です。昭和35年私共4期生は、117名が入学をしました。当時1期生から4期生まで総勢260名足らずの少人数で、広い校庭に校舎が1棟と神学校とがばつんとあるだけの小じんまりとした静かな学園でした。

入学すると、クラスは成績順により編成され、勉強について来れない者は、容赦なく振り落とされました。7時間授業は週2回もあり、不足分は夏・冬の休みにみっちり補習でたたき込まれたものです。中間・期末テストの成績は、父兄参観日にすべてロビーに掲示されました。私共は、中学生になったという気分に入る余裕もなく、とにかくしっかりと予習・復習をしないと取り残されるし、他の者には負けたくないというライバル意識を、知らず知らずのうちに植えつけられていたようです。

勉学は勿論のこと、朝も大変厳しく、毎日は敬虔な祈りにより始まりました。ベルが鳴るとどんな時でもその場で黙想をすることが義務づけられていました。廊下では走ることも禁じられていました。又遅刻者と服装の違反者には学校側は大変厳しい罰を与えていました。グラウンドを何周も走らされたり、校門に1時間立たされたり、放課後掃除やグラウンドの草抜きをさせられたものです。現在の学生諸君からは想像もつかないと思いますが、毎日毎日が息の抜けない連続でした。2時限と3時限の間に「中間体操」が実施され、上半身裸で全校生が体操をしました。当時みんな、この時間がくると、いやでうんざりしたものです。しかし、今になって考えると、厳しさだけではなく「健全な精神は健全な肉体から」という言葉のとおり、学校側は生徒の体を鍛えることも配慮していたようです。

この様な校風の中で、教育方針や勉学についてゆけず、退学、転校生もかなりあったことを覚えています。近頃、同窓会で友人と話し合ったり、中学時代学園を去った同級生たちと会うと、昔の口から、「当時の啓光学園は厳しかったけれど、1本筋金に通っていたなあ」という言葉がよく出ます。私も何か魅力のある学園だったと思いますし、人間として不可欠な、礼節、競争心を植えつけて頂いたことに感謝しております。

私共は2度と学生時代に戻ることはできませんが、啓光学園で学んだという誇りを忘れず、頑張ってゆきたいと思います。最後に今後の学園の発展を心からお祈りする次第です。

(四期生)



学園の聖母

校門を入ると桜並木が続く、瀟灑と

咲き競そう花をくぐりぬけると

聖母マリア像が立っている

朝に、夕に、先生生徒達を見守って

おられる 啓光学園の象徴である





入学式



年間行事予定 (高校)

| | | | |
|----|---|-----|----------------------|
| 4月 | 入学式、始業式、新入生オリエンテーション、知能検査、学力テスト、健康診断、身体測定、生徒会役員選挙 | 10月 | 中間試験 |
| 5月 | 遠足、中間試験、性格検査 | 11月 | 遠足、創立記念日、父兄参観日 |
| 6月 | 父兄参観日(父母の会総会・懇談)、校内大会、H.R.合宿 | 12月 | 期末試験、クリスマス行事、終業式 |
| 7月 | 期末試験、終業式、補習、修学旅行 | 1月 | 始業式、学力テスト |
| 9月 | 始業式、学力テスト、学園祭(体育祭・文化祭) | 2月 | 生徒会総会、校内大会、旺文社模試、卒業式 |
| | | 3月 | 学年末試験、スキー教室、終業式 |

年間行事予定 (中学)

| | | | |
|----|---|-----|-----------------------------|
| 4月 | 入学式、始業式、新入生オリエンテーション、知能検査、学力テスト、健康診断、身体測定、生徒会役員選挙 | 10月 | 冬服着用、中間試験 |
| 5月 | 遠足、中間試験、性格検査、信者父母懇談会 | 11月 | 遠足、創立記念日、父兄参観日、進研模試、信者父母懇談会 |
| 6月 | 夏服着用、父兄参観日(父母の会総会・懇談)、校内大会、学力テスト | 12月 | 期末試験、クリスマス行事、音楽鑑賞、終業式 |
| 7月 | 期末試験、終業式、補習、創作活動 志摩学校、修学旅行 | 1月 | 始業式 |
| 9月 | 始業式、学力テスト、水泳大会、学園祭(体育祭・文化祭) | 2月 | 生徒会総会、耐寒訓練、信者父母懇談会 |
| | | 3月 | 学年末試験、スキー教室、卒業式、終業式 |

高等学校修学旅行
東北・北海道方面



登山修学旅行を終えて



修学旅行に出発する前から、ほとんどの者が「なぜしんどい目をしていかなあかんのかな」という気持ちで出発したようだ。

7月19日、京都駅に集合した時もやはり同じ気持ちであった。一日かけて「白馬アルプスホテル」に着き、ただその日は「ホテルがきれいだなあ」という気持ちしかなかった。その夜は「いよいよ明日は登山だなあ」と思いつつ、いつのまにか寝てしまった。気がつく朝、「いやだなあ」という気持ちと「こうなったら」という気持ちが入りまじりながら、バスで朝食に着いた。もう一度、靴のひもをしめなおして意欲的に出発？白馬尻で小休止、いよいよ待ちに待った「大雪渓。近づけば近づくほどにだんだんすずしくなり、今までの汗もスッとひき、「とうとう登らなくてはい」と思う一方、恐怖感もあつた。しかし、「現実」に「真実」に一步一步踏みしめて登ったことを覚えている。しんどくなってとまろうと思っても後から後から来るし、小休止を幾度かはさみながら巧平で昼食。ただそこに着くまでにむちゃくちゃに疲れた。続いてのお花畑は時期が少しずれていたらしく、みごと、だという感じまではうけなかった。

宿舎がやっと見えてきた時は、疲れのピーク、(頂上までには相当時間がかかり)到着時刻は2時すぎ、登りはじめて約6時間。頂上で記念撮影、これで白馬を征服したんだなあ実感があった。山頂宿舎も、また日頃経験できない一つの思い出になった。

7月21日、杓子岳、鐘ヶ岳をのぼり、これで白馬三山をのぼりきった。くだりのしんどさを味わいながらも鍾温泉でゆっくり温泉に入り少しは疲れがとれたようば。そしてまた、一步一步下ってきた。その時にはもう無事だという気持ちでいっぱいだった。ホテルでの最後の夜はしんどいのも忘れ、ガヤガヤさわいでいた。最後にこれだけは言っておきたい。先生が言っておられたように「別に山登りなんて、楽しい事はない。でも、自分の足で一步一步ふみしめて命からがらのぼりおりました事は、ただバスで見学するよりも何か残ったものが心に残る」とぼくも思った。これは楽しいという意味ではなく、自分がやったのだという気持ちが残った修学旅行であったと改めて感じた。他の中学では味わえないものをつかめたようで非常にうれしい。

(中三生)



臨海学校の思い出



出発地点に渡る漁船に乗りこむとき、ここで仮病を使おうかと一瞬ひらめいた。しかしそんな勇気はない。おそろおそろ船に乗りこむ。友達の様子を見ていてもうれしい様子ではない。だからみんな不安があるのかもしれない。少しホッとした。下船の直前に又仮病のことを考える。次の瞬間皆と同じ行動をしているのに気が付く。ここまで来たのだから「がんばろう」という気持ち、もともにもどろろという気持ちが交さる。どうしてこんなに不安があるのか、この気持ちは、家を出るとき家族の者が言った言葉、「男ならがんばれ！海水だから浮くよ、大丈夫！」こんなものではない。

どうして不安なのか考えてみる。それは今まで平泳ぎはしたことがないからかも知れない。小学校にはプールがなく、水練学校に行ってもクロールだけだったこと。もともと運動神経がにおいこと、すべて不利だ。しかし、この二ヶ月余り学校での指導に、ぼくはがんばったつもりだ。だから今日は総仕上げなのだ。ということを考えているうちに少しは落ち付いてきた。とにかくがんばってみることだ。

水の冷たさにはげまされたように泳ぎはじめる。もうゴールをめざすしかない。時々水の冷たさが変わってびっくりする。これぐらいは、自然の場所だから当たり前だ。それぐらいのことを考えられるのだから、少しは余ゆうが出てきた。

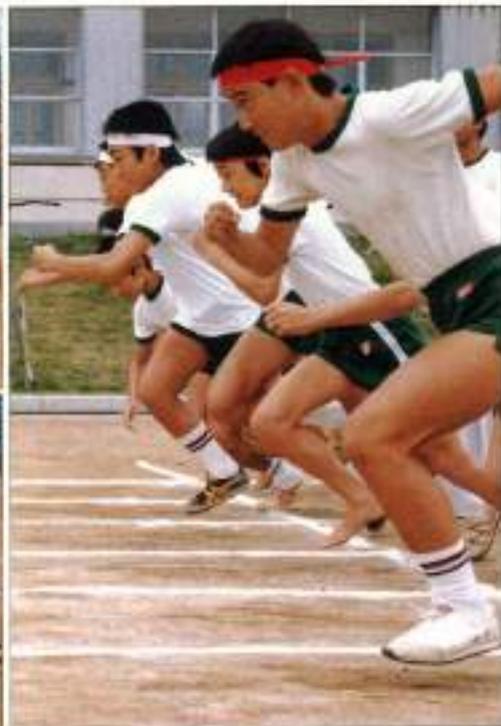
2年生の人が中心となって言ってくれるエーンヤコーラのかけ声も、カブつけてくれるし、先生方も絶えず近くを泳いで下さるので不安が消えてきた。でもホッとしていると、指の先に水くらげがきさった。周りからはいたいとか言う声が聞えてきた。ぼくはまださされてない。そうこうしているうちにさけようとする間もなく腕をやられた。

クラゲのハブニングにもどうにか切り抜けて手足のつかれも極限に達したかと思うと、横の方にあった冠者島がない。通り過ぎたのだ。

するとエーンヤコーラのかけ声が一段と高くなってゴールの近づいたことを知らせてくれる。最後のふんばりだ。砂のかんしょくが足につたわってきた。完泳だ。ぼくにも泳げた。何度も何度も心の中でよろこびさげんだ。このうれしさは一生忘れることはない。

(中一生)





体育祭



文化祭



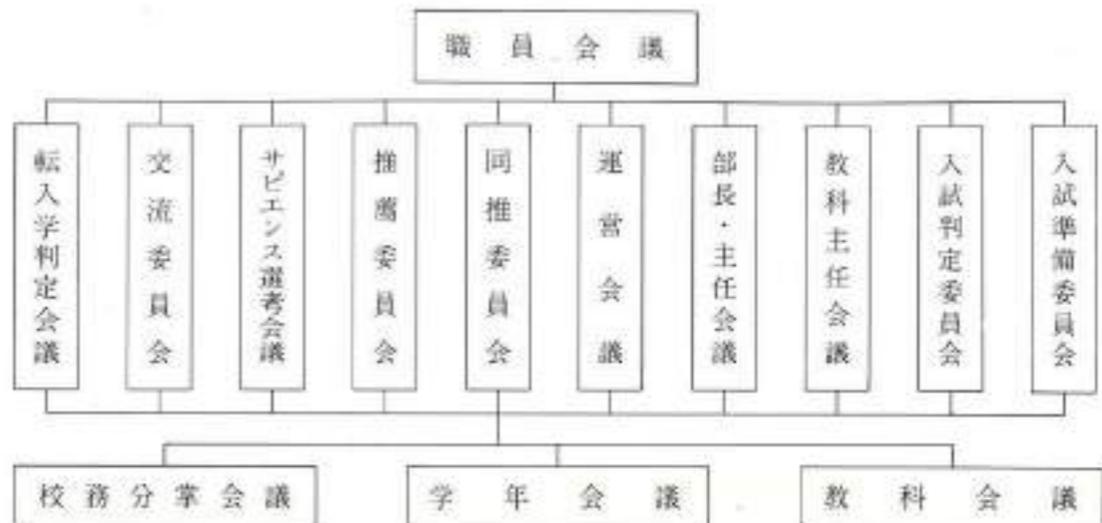
聖堂



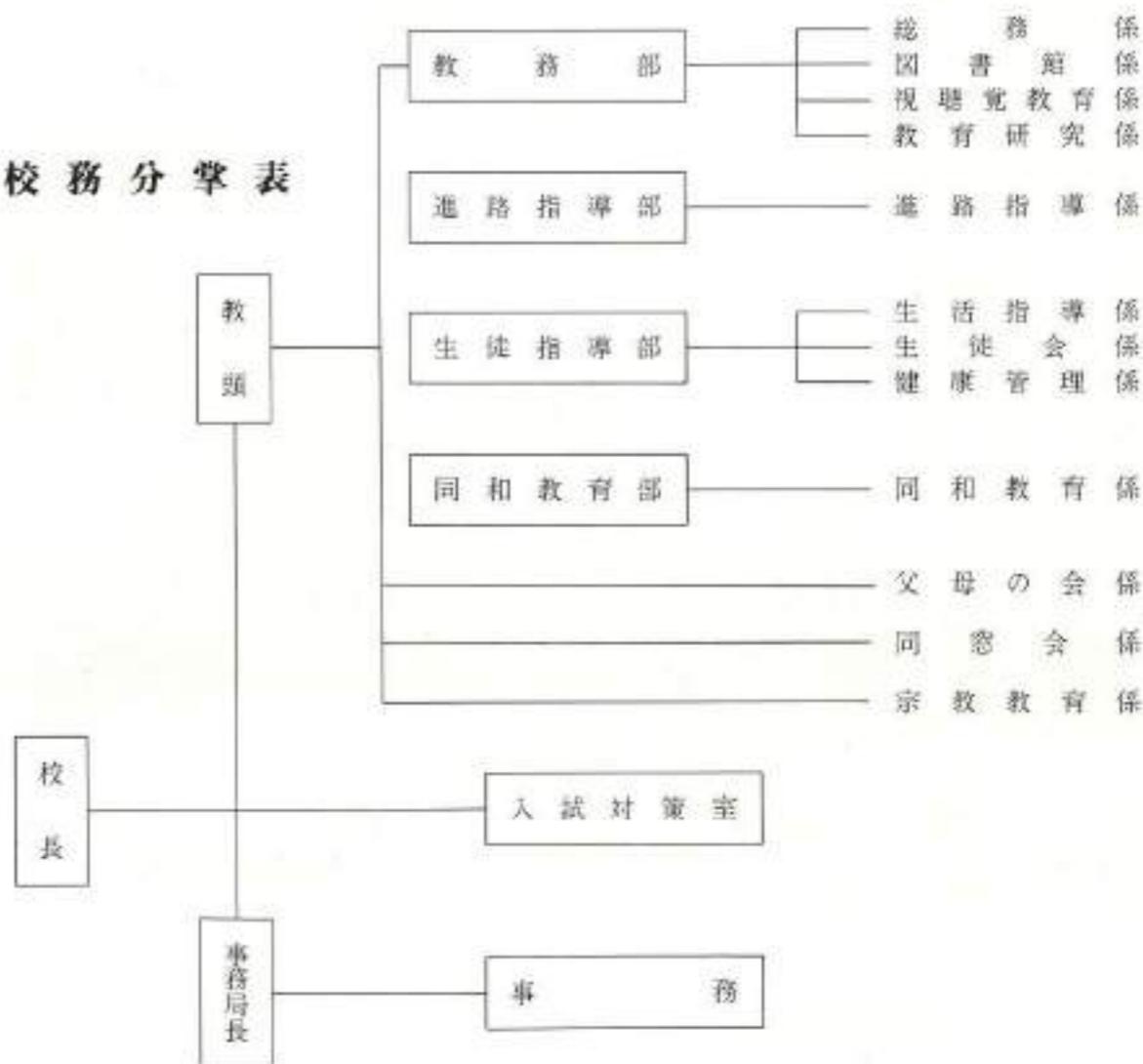
朝の祈り



登校



校務分掌表



施設並びに設備概要

| | | | |
|-------|---------|-----------|--------|
| 校地 | 40,133㎡ | 校舎 | 6,975㎡ |
| 第一運動場 | 16,993㎡ | 啓光会館 | 955㎡ |
| 第二運動場 | 7,868㎡ | 体育館 | 1,120㎡ |
| | | プール | 50m |
| | | クラブハウスその他 | 241㎡ |

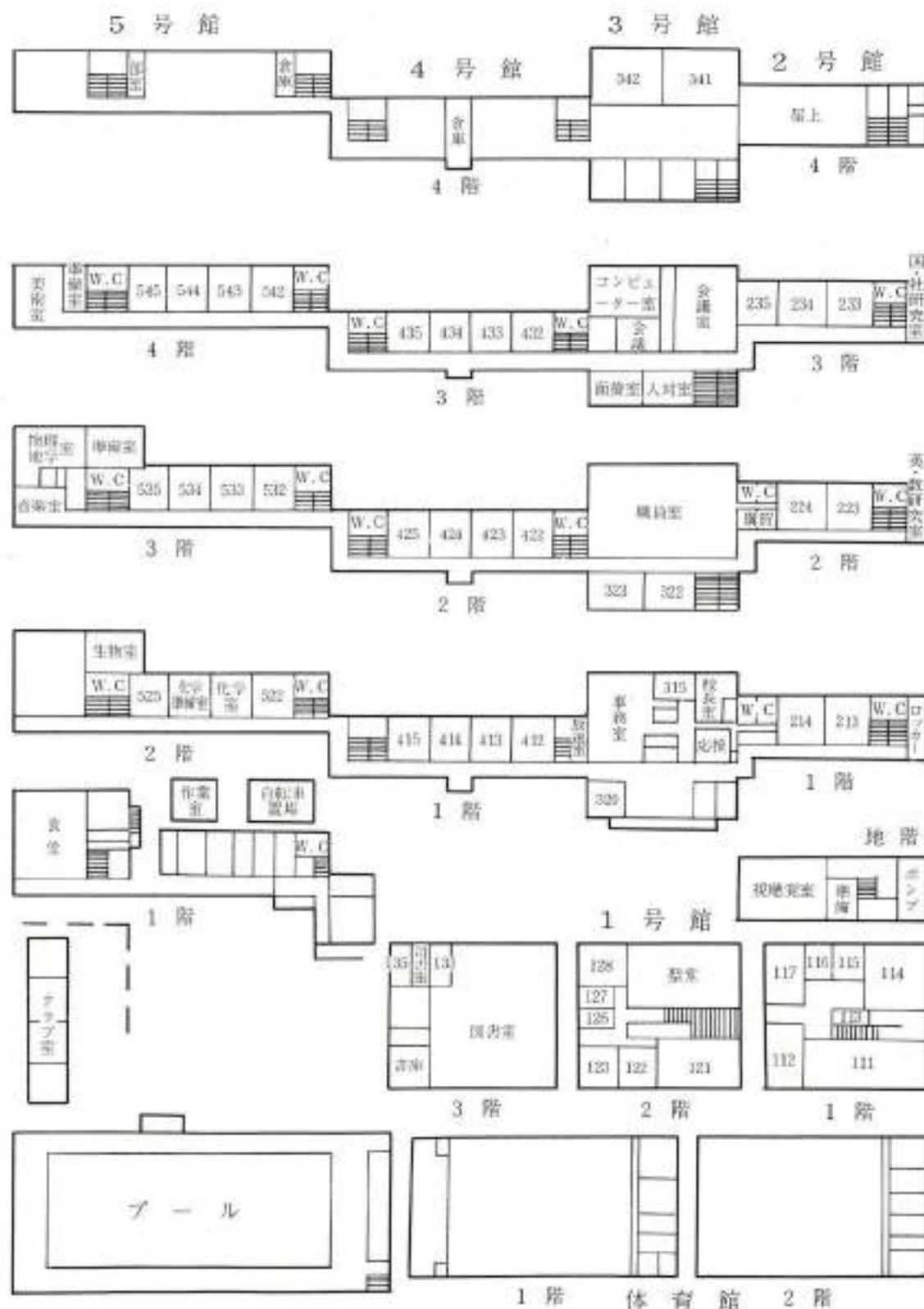


全景 ①1号館 ②2号館 ③3号館 ④4号館 ⑤5号館 ⑥体育館 ⑦プール ⑧正門 ⑨第一運動場
⑩第二運動場 ⑪南門 ⑫クラレチアン・レジデンス ⑬学園の聖母

環境

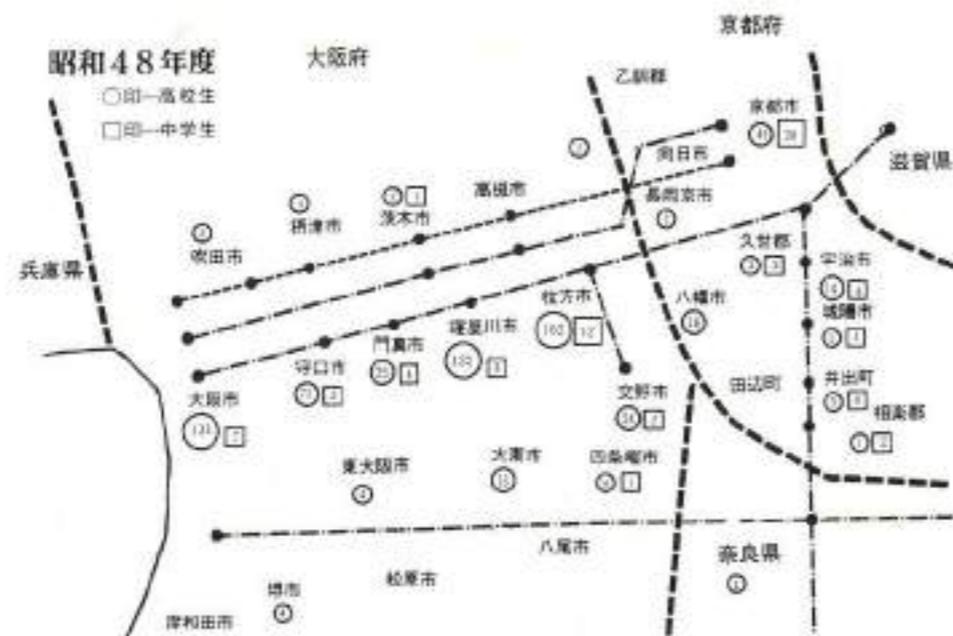
京阪枚方市駅を出て東の方に天の川を渡ると、公団中宮団地にはさまれた40,100㎡余りの高台に美しい校舎が並立している。歩いて12・3分の距離空は高く、空気は清らかで公害は一つない、校門をはいると右手に広い庭園がみられ、校舎の背面には雑木林が続いている。都会の喧騒の中で暮している子どもたちにとって、学園は限りない安らぎと清新な気持を起こさせる。このような教育環境は実に素晴らしい。

教室配置図



昭和48年度

○印—高校生
□印—中学生

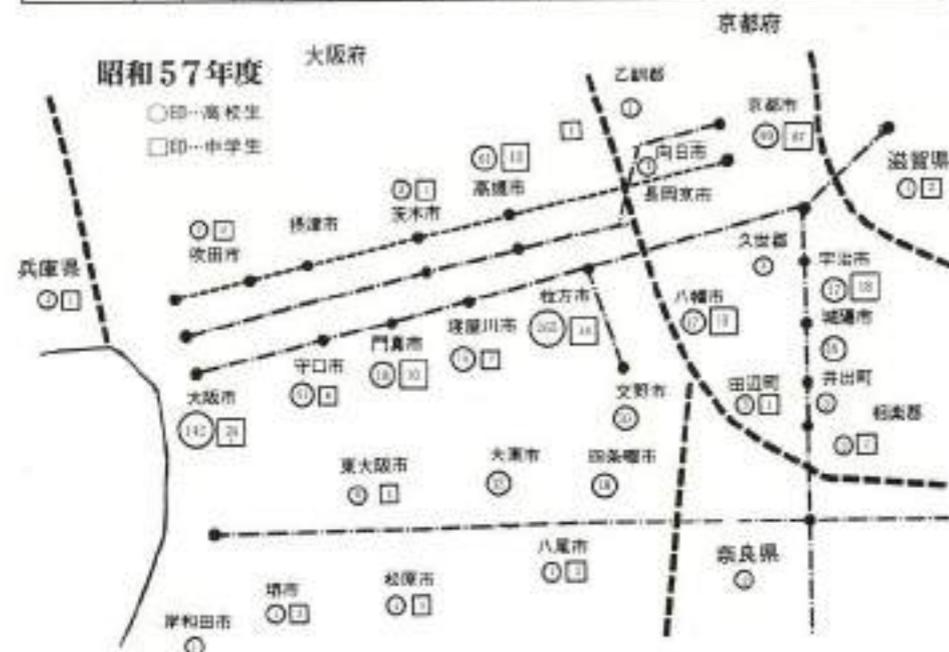


生徒の通学区域

| 市町村名 | 昭和57年 | | 昭和58年 | | 市町村名 | 昭和57年 | | 昭和58年 | |
|------|-------|----|-------|----|------|-------|----|-------|----|
| | 高 | 中 | 高 | 中 | | 高 | 中 | 高 | 中 |
| 大阪市 | 142 | 24 | 131 | 7 | 東大阪市 | 6 | 1 | 4 | |
| 岸和田市 | 1 | | | | 西条市 | 18 | | 9 | 1 |
| 吹田市 | 2 | 2 | 2 | | 文野市 | 50 | | 24 | 2 |
| 高槻市 | 61 | 12 | | | 八尾市 | 2 | 1 | | |
| 守口市 | 61 | 6 | 73 | 3 | 三島郡 | | 1 | 1 | |
| 枚方市 | 265 | 14 | 162 | 12 | 京都市 | 99 | 87 | 41 | 28 |
| 茨木市 | 2 | 1 | 1 | 1 | 宇治市 | 17 | 18 | 14 | 4 |
| 寝屋川市 | 75 | 7 | 122 | 3 | 城陽市 | 18 | 1 | 5 | |
| 大東市 | 32 | | 13 | | 八幡市 | 17 | 13 | 18 | |
| 門真市 | 18 | 10 | 25 | 4 | 向日市 | 1 | | | |
| 摂津市 | | | 5 | | 長岡京市 | | 1 | 2 | |
| | | | | | 乙訓郡 | | | | |
| | | | | | 京都市 | | | | |
| | | | | | 向日市 | | | | |
| | | | | | 長岡京市 | | | | |
| | | | | | 久世郡 | | | | |
| | | | | | 宇治市 | | | | |
| | | | | | 城陽市 | | | | |
| | | | | | 井出町 | | | | |
| | | | | | 相楽郡 | | | | |
| | | | | | 八尾市 | | | | |
| | | | | | 奈良県 | | | | |
| | | | | | 岸和田市 | | | | |
| | | | | | 堺市 | | | | |
| | | | | | 松原市 | | | | |

昭和57年度

○印—高校生
□印—中学生



卒業生数

中学校

| 回数 | 年・昭和(西歴) | 卒業者数 | 回数 | 年・昭和(西歴) | 卒業者数 |
|----|-----------|------|---------|-----------|------|
| 1 | 35 (1960) | 11 | 16 | 50 (1975) | 29 |
| 2 | 36 (1961) | 24 | 17 | 51 (1976) | 27 |
| 3 | 37 (1962) | 72 | 18 | 52 (1977) | 41 |
| 4 | 38 (1963) | 104 | 19 | 53 (1978) | 45 |
| 5 | 39 (1964) | 160 | 20 | 54 (1979) | 41 |
| 6 | 40 (1965) | 168 | 21 | 55 (1980) | 27 |
| 7 | 41 (1966) | 90 | 22 | 56 (1981) | 29 |
| 8 | 42 (1967) | 97 | 23 | 57 (1982) | 16 |
| 9 | 43 (1968) | 44 | 合計 1235 | | |
| 10 | 44 (1969) | 46 | | | |
| 11 | 45 (1970) | 40 | | | |
| 12 | 46 (1971) | 32 | | | |
| 13 | 47 (1972) | 31 | | | |
| 14 | 48 (1973) | 39 | | | |
| 15 | 49 (1974) | 22 | | | |

高等学校

| 回数 | 年・昭和(西歴) | 卒業者数 | 回数 | 年・昭和(西歴) | 卒業者数 |
|---------|-----------|------|----|-----------|------|
| 1 | 38 (1963) | 20 | 11 | 48 (1973) | 210 |
| 2 | 39 (1964) | 31 | 12 | 49 (1974) | 226 |
| 3 | 40 (1965) | 94 | 13 | 50 (1975) | 224 |
| 4 | 41 (1966) | 118 | 14 | 51 (1976) | 256 |
| 5 | 42 (1967) | 175 | 15 | 52 (1977) | 186 |
| 6 | 43 (1968) | 190 | 16 | 53 (1978) | 354 |
| 7 | 44 (1969) | 180 | 17 | 54 (1979) | 347 |
| 8 | 45 (1970) | 192 | 18 | 55 (1980) | 329 |
| 9 | 46 (1971) | 174 | 19 | 56 (1981) | 260 |
| 10 | 47 (1972) | 173 | 20 | 57 (1982) | 244 |
| 合計 3983 | | | | | |

教職員一覽

教科別教員数

| 教科 | 道徳 | 国語 | 社会 | 数学 | 理科 | 英語 | 保・体 | 芸術 | 養護 | 講師 |
|----|----|----|----|----|----|----|-----|----|----|----|
| 人 | 1 | 10 | 10 | 7 | 8 | 8 | 6 | 2 | 1 | 20 |

教職員名簿

| 職名 | 氏名 | 担当教科 |
|------|-------------|------|
| 理事長 | Fr. デ・グランデス | |
| 校長 | 小野 教 | |
| 教頭 | 松井 秋郎 | 理科 |
| 事務局長 | Fr. フランケサ | 道徳 |
| 講師 | Fr. マリオ | * |
| * | Fr. ハイメ | * |
| 教諭 | 石崎 文男 | 国語科 |
| * | 岩田 宗親 | * |
| * | 加藤 剛男 | * |
| * | 北山 薫 | * |
| * | 斉藤 昭 | * |
| * | 滝沢 義孝 | * |
| * | 徳永 允律 | * |
| * | 植江 美沙子 | * |
| * | 西園 将美 | * |
| * | 水野 博司 | * |
| 講師 | 芳村 弘道 | * |
| * | 今場 正美 | * |
| * | 坂崎 弘 | * |
| 教諭 | 井上 利之 | 社会科 |
| * | 岩井 忠孝 | * |
| * | 園田 真司 | * |
| * | 斉藤 徹 | * |
| * | 敷島 康雄 | * |

| 職名 | 氏名 | 担当教科 |
|----|--------|------|
| 教諭 | 高橋 勝幸 | 社会科 |
| * | 丸山 哲司 | * |
| * | 森田 光廣 | * |
| * | 山口 猛典 | * |
| 講師 | 山内 重芳 | * |
| 教諭 | 秋田 聡 | 数学科 |
| * | 砂場 正也 | * |
| * | 遠井 方子 | * |
| * | 中西 敬一 | * |
| * | 西田 親正 | * |
| * | 宮脇 敏生 | * |
| * | 吉武 直樹 | * |
| 講師 | 中原 繁樹 | * |
| * | 花田 和男 | * |
| 教諭 | 尾崎 隆三 | 理科 |
| * | 久保 俊雄 | * |
| * | 佐々木 洋一 | * |
| * | 高岸 義弘 | * |
| * | 中島 常行 | * |
| * | 布村 良夫 | * |
| * | 長谷川 勉 | * |
| 講師 | 古谷 信也 | * |
| * | 石水 康壽 | * |
| * | 浪越 雅夫 | * |

教職員名簿

| 職名 | 氏名 | 担当教科 |
|----|------------|-------|
| 講師 | 松田 眞一 | 理科 |
| 教諭 | 石井 泰博 | 英語科 |
| * | 桑田 和彦 | * |
| * | 清水 輝夫 | * |
| * | 清竹 健司 | * |
| * | 広瀬 良次 | * |
| * | 山中 純一 | * |
| * | 松尾 和敏 | * |
| * | 丹羽 照夫 | * |
| 講師 | 長砂 俊弥 | * |
| * | 南村 武造 | * |
| * | 松浦 誠造 | * |
| * | 北川 栄一 | * |
| * | B.M.BENSON | * |
| 教諭 | 下山 正三 | 美術科 |
| 講師 | 青山 良祐 | * |
| 教諭 | 真田 基兼 | 音楽科 |
| 講師 | 渋谷 秀兼 | * |
| 教諭 | 石塚 勇和 | 保健体育科 |
| * | 記笹 敏和 | * |
| * | 笹倉 英夫 | * |
| * | 津野 和彦 | * |
| * | 吉本 道雄 | * |
| * | 渡辺 秀 | * |

| 職名 | 氏名 | 担当教科 |
|------|--------|-------|
| 講師 | 桐原 聡 | 保健体育科 |
| * | 安江 毅 | * |
| 図書 | 西本 百合子 | |
| 室長 | 宮井 きみ枝 | |
| 教務助手 | 江馬 智子 | |
| 理科助手 | 雲林 栄枝 | |
| 事務主任 | 高田 卓 | |
| 事務 | 馬越 祐子 | |
| * | 佐々木 勝吉 | |
| * | 杉山 美智子 | |
| * | 濱 浩子 | |
| * | 木庄 俊彦 | |
| 購買 | 和田 美代子 | |
| 校務 | 石橋 道子 | |
| * | 池田 さく | |
| * | 井上 弓美子 | |
| * | 板東 義三 | |
| 警備 | 島 芳雄 | |
| * | 井上 信貴 | |
| 校医 | 藤井 正市 | |
| (内科) | 金 森 | |
| 校医 | | |
| (歯科) | | |

生徒会・クラブ活動

本学園の生徒会は、中、高それぞれ「啓光学園生徒会」を構成し、執行委員会を軸にホーム・ルーム活動、クラブ活動その他学園生活の自主的運営生徒各自の健全な社会性習慣のために努力している。本学園の生徒は、学園の歴史同様、長い伝統こそもっていないが今25周年の伝統と今後の大きな発展の礎石たらんとする意気込みは非常にさかんである。

また、クラブ活動は勉学の余暇を利用して行われ、ラグビー部は43年に全国大会に出場、水泳部は国体インターハイに選手を送り私学大会に優勝、バドミントン部は幾度か私学大会に優勝、文化部では音楽部が53年NHKテレビに出演、毎年京阪各市で定期演奏会を開催するなどその他各クラブも、それぞれ特徴ある活躍を続け、輝かしい業績をあげている。



剣道部

第5期の先輩により作られ、現在までに120余名の卒業生をかかえるまでになっています。現在の部員は高校生12名と、1昨年出来た中学部13名を含めると25名の部員で活動しています。残念ながら試合成績はいまひとつです。現在の活動日(体育館使用日)が週3日しかなく、部活動の大きなブレーキになっています。59年度新体育館が建てられれば、毎日活動が出来れば大きく躍進できるものと期待されます。



硬式テニス部

創部20余年。常に20数名であった部員数も、近年のテニスブームで今年は35名を数えます。中高とも「テニスの虫」の集まりですが、何と云っても悩みの種はコート不足。軟式・硬式に共用のコートが一面では中学生の練習がままならず、昨年からは第3グラウンドにネットを張って頑張っています。しかし防球フェンスもなく、出入りが自由なため、ボールを打つよりも整備時間の方が長い有様です。そのような状況下で、今年から中学生も公式戦に参加し、中1が北河内地区大会で優勝する殊勲をたてました。



サッカー部

サッカー部の歴史は、5期生から同好会として始まった。指導はスペインの神父が主であった。その後、木田先生、出島先生、塚本先生が指導された。しかし、サッカー部の歴史の大半は、生徒同志、あるいは先輩の指導で自主的に練習してきたといえる。7期生の小牧キャプテンの時には、大阪府下の大会でベスト8に入ったこともあった。8期の根永、9期の辻、12期の山口は信頼されたキャプテンであり、山口は大阪府のベストイレブンに選ばれた。近年はチームプレーを中心に、チーム全員でプレーをするようにしている。そのせいか、個々の技術的な未熟さにもかかわらず、大会では3回戦から4回戦に歩を進めるようになってきた。印象に残る好プレーをした7期生の由利孝清君が、若くして強者した。賞賛を祈りたい。



柔道部

昭和50年、同好会として発足。同じクラスの5名により、道場も敷もなく、また練習する場所もない最悪の状況で、ただ柔道をやりたいという生徒達の情熱に支えられ、野外で、または、体操用マットを体育科より買ってきて細々とやっていた。しかし、その後中学時代柔道をやっていた先輩が続き、有志者も出て、部に昇格(553)その後、枚方市の柔道部と合同練習もさせてもらっていましたが、交野市青年の家の道場で練習させてもらえるようになり、私学大会で個人ベスト4位まで進む生徒も現われやっとな年交野市にある警察学校道場の古い後など40歳ほど子に入り、学校の体育館で練習出来るところまで来たが、対外試合や立派な成績をあげるところまではいっていないのが現状です。(現在部員数14名)



水泳部

我が水泳部は、部員数14名と少数ではあるが、一昨年は団体に1名、昨年からは個人大会及びインターハイに数名の選手を出場させることができた一応の成果ができています。今年は、特に部の急進と言わなければならない一歩も二歩も前進しているともいえる大阪府高校対抗において総合3位を獲得、それよりもっと、うれしかったことは、大阪府私学大会においての総合優勝です。また、個人においても、団体に1名選出され、さらに毎年4月に行なわれる日本室内選手権及び8月に行なわれる日本選手権というビッグイベントに参加することもでき、今年は、我部にとって最高の年でした。———三年生も8月に行なわれたインターハイを最後に引退し、現在は約一・二年の部員が来年度の全国大会(インターハイ)に向けて、全力で連日の猛練習に励んでいます。



スキ部

日常の活動(陸上トレーニング)は、4月～7月を主に基礎体力養成を目的とし、9月～11月は雪上トレーニングを想定して、リズム感覚、敏捷性、持久力を養成している。12月の冬合宿は1月に行なわれる大阪大会、近畿大会に的をしぼり、主に回転、大回転トレーニングを行っている。春合宿では新人大会を目指し、OBも参加指導し恒例の啓光カップ争奪戦、デュアルレースも開催している。今、部員一同打倒同志社、近大で燃えている。



卓球部

ひところ衰微の一途をたどっていた卓球部も、ようやく復興のきざしが見えはじめた。現在の部員は高3が2名、高2が8名、高1が5名の計15名。いまのところ団体戦の成績はいまひとつだが、個人では今年の全日本卓球選手権ジュニアの部で、府予選会を通過する者も現れた。また日常の練習のほか、夏の合宿、文化祭の模擬店参加、他校との練習試合など、部としての活動も軌道に乗っており、今後の発展がおおいに期待できるといってよい。



軟式テニス部

3年前までは部員も多く、夏期合宿を信州で行ったりして部活動も活発であった。部員も3年生の夏の私学大会まで試合に出場し、私学大会団体戦でベスト8まで進出したこともある。昨年は新人戦で1組が中央大会に出場したが、今年は中央大会に出場する組もなく低調な成績である。来年度は是非新入部員を増し、従来のクラブ活動が出来よう、部員一同頑張っていくつもりです。



バスケットボール部

我がバスケットボール部は、42年度卒業の中西、小林、浅田の三氏と富田、加藤両先生の指導のもとで創部され、昨年度の卒業生を含めると95名のOB諸氏がいます。現在は高校14名と三年前に創部した中学部20名とで34名の部員がいます。今年の目標は、中・高とも公式戦初勝利を目指して毎日練習に励んでおります。なお、OB会関係の御世話は、43年度卒業の藤近氏と51年度卒業の柴田氏が中心になって頂いております。お暇な時に後輩の御指導よろしくお願ひします。



バドミントン部

来年、創部20年を迎えるわが部は過去の輝かしい栄光を再び取り戻そうと、現在高2学年4名、高1学年7名の部員が技術の向上はもとより、基礎体力の養成が肝要と日々努力を続けています。毎年OB会からの資金的援助も受け、啓光では比較的に恵まれたクラブとして、来年度はOB会の期待にも応えるべく府の代表になることを目標にして体育館での練習にも熱が入っています。



バレーボール部

47年バレーボール同好会として発足し、49年部に昇格して以来10年、30名余りの卒業生を送り出し、社会の各方面で活躍している。初期の頃に比べ現在では、部室が与えられ、週3回の体育館練習も出来、又グラウンドにコートを作り、部員16名が、先輩諸兄から受け継いだ伝統を守り、自主的活動に励んでいる。ここ2〜3年技術の向上も目ざましく、夏休みを利用しての3泊4日の郊外での合宿では、チームワーク作りを中心にしながら卒業生との交流を図り、上位進出を目標にして練習に取り組んでいる。



野球部

部員不足のため、他クラブからコンバートしなければ試合ができないという困難な時代が10年。しかし近年は中学時代野球を経験していた優秀な選手が定着しだし、クラブとして組織だった練習ができるようになってきました。そして数年前から公式戦でも白星が増え出し、連まきながら、固い蕾からやっと暖かい春を迎え、いつでも開花できる状態になってきました。現在部員は15名、顧問の斎藤徹、高橋岡先生(どちらも社会科)と力を合わせ、伝統的な気の弱さはありますが、「真面目な高校野球」を目標に、毎日頑張っています。



ラグビー部

ここ数年、各大会とも準決勝、決勝で涙をのむことが多かったが、今年は、春に3回目の近畿大会出場を果たし、その後に行なわれた春季大会でもブロック優勝を飾ることができた。そのために秋の全国大会の予選ではシード校として出場することが決まっている。クラブ自身も毎年、少しずつ変化がみられ、部員数も格段に増え、父兄会も昨年、発足し、生徒と父兄が一丸となって、クラブ向上に努めている。



陸上部

我が、陸上競技部は昭和35年ごろ、第一期生によって活動を開始し、今年で22年になり少人数の活動であります。クラブとしての活動は充実したものです。大会成績は大隈大会どまりが多いが、年々上位成績の者が、多くなってきています。また54年からは、中学陸上競技部も活動を始め、府大会等で上位入賞、私学大会で上位入賞者を多数出し、府下私学中学校において上位成績をおさめるようになりました。



ワングエル部

昭和37年、山の好きな二期生数名が集まり、小林弘先生を顧問にクラブを創った。今年で20年になるがこの間のワングエル卒業生は70人程になる。その中には卒業後も活躍している者も多い。黒部の麓ルートの壁を初登攀したもの、ヒマラヤの高峰に挑んだ者もいる。また地道に自分なりの山を楽しんでいる者も数多くいる。昭和43年には白馬山麓にすべて自分らの手で山小屋を建てた。今も、現役、OBとわず、春夏秋冬常に活用している。



音楽部

音楽部の歴史を振り返って、最も残念な事は、昨年(昭和56年9月12日)に平原先生が亡くなられたことです。まだまだ音楽部のために、活躍していただきたかったのにも思います。その後を引き継いで現在活動しているメンバーはH2-1名、H1-3名、M3-3名、M2-3名、M1-9名の状態で、日々文化祭に向けて練習に励んでいます。OBも何人かは時々参加してくれて後輩の指導にあっています。中学生が中心ですが、皆一生懸命に頑張っていますので、これからも御支援をお願いいたします。



化学部

化学部が創設されてから20年近くなり、OBも50名に達した。毎年4月に新入部員を迎えてからその年度の活動テーマを決定している。決定されたテーマについてそれぞれの部員が調査・研究・実験を始める。その結果を夏の合宿で中間発表し、さらに夏休み、9月になってからの放課後を利用したクラブ活動で内容を充実させている。これまで文化祭の展示部門で毎回表彰されているのも部長の努力、部員の団結、OBの協力による以外なものでもない。今年も「良い水・悪い水・普通の水」というテーマで活動し、水についての研究・実験で文化祭に参加した。



カトリック研究部

本校はカトリック系ミッションスクールゆえ、クラブの中にカトリック研究部があります。現在、部員数は約20名で、中学部、高等部と別かれています。部員の多くは、カトリック信者であり、司教、信者先生の指導のもとに、霊的指導、その独自の活動を展開しています。4月には、信者新入生歓迎練習会があり、1年間の活動内容を計画します。8月には、2泊3日のキャンプを実施し、心を中心とした信者間の連絡を培っています。9月には、文化祭に展示をします。内容は、「キリスト、救済、聖母マリア、教会史」など多岐にわたっています。12月には、学校クリスマスに参画し、イエスキリストの御降誕を盛大にお祝います。その他、毎週、放課後には、司教、先生の指導のもとに、聖書研究、ディスカッションなどを実施し、キリスト教について知的、霊的な面から、日々研鑽に励んでいるところです。



コンピュータ部

「数学の現代化」に呼応して10年前に誕生、現在部員数は中学2名高校25名、日進月歩の世界ということで、コンピュータそのものの変遷ささまじく、今やパソコン時代。昨年購入されたMZ80型1台を囲んでの活動は目ざましいものがあります。人間と機械の孤独な苦の操作も、4・5人が頭を寄せ合い、意見をかわしながら、和気あいあい、プログラム作成に、ゲームに取り組んでいます。そのうち他校との交流も目標の1つです。



写真部

科学技術の進歩とともに、写真機の性能も飛躍的な向上を遂げた。もはやこの段階では、写真を単に写せることは特技ではなくなった。中高生でなければ発見できないテーマを見つける目と技量を持つことこそ、今最も必要である。部員数も今年度は20名を超え、品評会、学習会を通し、内容的な充実を図る活動も動き出している。暗室の中での孤独な作業が、一枚のパネルとして膝の目を見る時、人々に新鮮な感動を与え得るような作品を生み出すための地道な努力を重ねるクラブでありたい。

中学



M2A



M1A



M2B



M1B



M3A

タイブ同好会



昭和34年創部、昭和37年専攻会館が落成し2階にタイプライター室が出来、部室がもうけられ、翌年4月から本格的に活動を開始した。部員は非常に多く30名を超えていたのが常で部員は毎日放課後時間を区切って練習したこともあった。自費も当初、スミス・コロナ25台が揃っていたことも現今のクラブ事情とは大差がある。京都商工会議所主催の検定合格者も出し、タイプライターに興味を持った卒業生が今事務機会社で新入社員を指導していることを知り嬉しく思っている。クラブ発足当時から早や20有余年、しかしついさきのうのように思えてならない。

無線研究同好会



以前は随分、活発に毎日の活動をしていた。カードもたくさん来ていたし、学園祭には成果を展示した。しかし如何せん、無線機が故障して以来、部員はバラバラになり、活動は止まった。修理する費用がなければ、なす術もなし、今や半壊状態。

放送同好会



校内大会、体育祭、文化祭、合同朝礼などの各種行事に必要な放送機器の準備、片付けが主な仕事であり、地味な奉仕活動になりがちである。現在、高校6名、中学4名の部員がおり、日常的には、昼休みを利用して伝達放送をしたり、アナウンスの仕方や話し方の勉強をしたりしている。教室にディスク・ジョッキーを流したりしたこともあったが、騒音と感じる生徒がいたりして、現在はやめている。

書道部



書道部は昭和50年に同好会から出発し、52年に部となり現在に至っている。発足当時は部員も少なく、その存続さえも危ぶまれたが、年毎に増え現在は中学生3人、高校生5人で活動を行っている。週2回の活動日と設け、古典の臨書を中心に技術の向上をめざし、年1回の合演においては部員相互の親睦につとめている。さらには日頃の成果を発揮すべく文化祭への参加と読売新聞紙上展や各種展覧会への出品にも力を注いでいる。

美術部



我部は50年から様変わりをした。まず夏合演(鳥取県夏泊にて)、秋には私学展出品と初体験づくめの年となった。しかし部員は5人だがそのエネルギーな活動は新任の私には満足であり、年々部員も増えその頂点は53年の私学展学校団体賞受賞であった。部員8名で作品100号16点出品したのである。その後部員は減り出品はしているが、今では栄光の学校団体賞は過去の栄光になってしまったが鑑賞作品には何点か選ばれているが……

新聞同好会



重要な活動分野でありながら、今だに「部」としての存在を確立し得ないのは、このサークルが組織として、継続してこそ何度も活動が中断してきたからである。現在の新聞同好会は2年前の秋、有志に呼びかけてスタートしたもので、正確には発足以来25ヶ月目を迎えている。月1回の発行で14号まで順調に続いている。その時々々のメンバーの資質や情熱の有無が記事の内容に如実に現われてくるだけに、緊張感もあり楽しみもある。



M3B



H1B



H1E



H2B



H1C



H1F



H2C



H1A



H1D



H2A



H2D

高 校



H2E



H3A



H3D



H3G



H2F



H3B



H3E



H3H



H2G



H3C



H3F

故きを温たため……

編集後記

25周年記念行事について公式の場で始めて話が出たのは昭和53年11月13日の定例理事会で、(1)祝賀行事は実施する。(2)昭和57年にするか58年にするかは今後検討する、と記録にあります。その後54年に2回、55年に1回、56年に2回、正式議題として出ています。その時点までは記念誌、予算等のことのほか、会場は枚方市市民会館が考えられていました。準備委員は56年9月に結成され、校長・教頭・事務局長公選による丸山・井上・岩田の各先生及び事務主任を加えて計7名が決まりました。56年12月20日に準備委員と退職された古い先生方約10名との懇談会を持ち、記念誌への原稿をお願いしています。併せて古い現在の先生方にも思い出話等の原稿を依頼しました。この時期迄を全体の仕事の流れからみて前段階としますと、57年度に入ってからは愈々準備本番の段階になりました。記念誌の内容を年度別経過を追った記述式のものにするか、或は写真を中心とした印象的なものにするのかは論議がありましたが、結局後者が選ばれました。記念誌編纂に関連して色々な資料が集められ、整理されました。学園の変遷の跡を客観的に再映し綴ってゆくことはなかなかむづかしい仕事と感じました。又これを機会に同窓会が組織も内容も画期的に整備されましたことは喜ばしいことでもあります。後に、学校長ほか関係の先生やニシムラ・フォートの福田氏が非常な努力を尽くされたことを報告します。



啓光25周年記念誌

編集委員

編集 啓光学園記念誌編集委員
発行 昭和57年11月2日
発行者 啓光学園・中学校・高等学校

小野 教
松井 秋郎
Fr. フランケサ
丸山 哲司
井上 利之
岩田 宗親
高田 卓

〒573 大阪府枚方市禁野本町1丁目13番21号
TEL. 枚方(0720)48-0521代

制作 KK.ニシムラ・フォト・スタジオ
福田 哲夫

印刷 KK.平井真美館

大阪市天王寺区玉造本町4-2 TEL.06(761)7503

本社 奈良市西本辻町59 TEL.0742(33)3775

